

# イデオロギーとテロル(五)

— 共產主義的全体主義独裁制における恐怖と狂気のシンフォニー —

小沼 堅 司

## (目次)

### 一 「知識人の阿片」

林達夫「共產主義の人間」 〓 抽象的人民への愛と生身の人間の虐殺／ステイファン・ツヴァイク 〓 「思想の独裁」の恐ろしさ／モリス・マルクスのアイロニー／『共產主義黒書』 〓 共產主義のバランスシート／サルトル・カミュ論争 〓 革命的ニヒリズムと反抗的人間の倫理／階級的全体主義と人種の全体主義／レーモン・アロン、シモーニュ・ヴェーユ 〓 「知識人の阿片」としてのマルクス主義／政治的宗教によるロシア正教会と民衆文化の破壊／バートランド・ラッセル 〓 ポリシェヴィキの宗教的狂信と憎悪の独断論の告発／マルクス・レーニン主義の非情 〓 「餓死する民を救援するのは甘ったれた感傷主義である」／政治的宗教としての全体主義／ジョージ・オーウェル 〓 神なき宗教、メシアニズムの恐怖／「プラウダ」(真理)の社説以外に「イスチナ」(真理)はない／全体主義的救済 〓 プラトンの誘惑／指導者崇拜 〓 ナルシズム幻想の共同化／一つの事例 〓 北朝鮮全体主義に憑かれた人々

(以上二一七号)

### 二 全体主義の予備的、一般的考察

- (一) はじめに—「カチンの虐殺」 〓 「民族浄化」と「階級浄化」の悲劇
- (二) イデオロギーとテロル—ことばの起源と展開
  - (1) イデオロギー

## (2) テロル

(以上一一八号)

## (三) ナチズムと Kommunismus

(1) 第一次世界大戦と反ブルジョア—— Kommunismus とナチズムの呼応関係

(2) ナチズムの政治的・精神的背景

(3) 人種主義(反ユダヤ主義)のレトリック——「自己投影のからくり」

(4) カリスマ共同体——M・ヴェーバー「人民投票的指導者民主主義」「人民投票的独裁制」の勝利か？

(5) スベクタクル政治——大衆／テアトロクラシー／神話／暴力

(以上一一九号)

## (四) H・アレント、T・トドロフ、R・アロンの全体主義論

全体主義政治＝全く新しい現象／モンテスキューの統治形態類型区分——「統治の本質」と「行動の原理」／全体主義の「統治の本質」＝テロル、「行動の原理」＝イデオロギー／大衆の支持と献身／「種族的ナショナリズム」／政党から運動の時代

へ／全体主義運動＝「見捨てられた存在 (Verlassenheit, loneliness)」・大衆の自己救済／知識人エリートへの〈破壊の衝動〉と

〈衝動の美学〉の充足／イデオロギー＝演繹的論証の強制／テロル／強制収容所＝根源的な悪／アレントの思想的抵抗拠点＝

「事実に基づく真実」(factual reality)／ツヴェタン・トドロフの全体主義解剖／レイモン・アロンの「イデオクラシー」

〔以上一二〇号〕

## 三 左翼全体主義——レーニンと十月クーデタ

(以下本号)

## (一) はじめに

## (二) 二月革命

## (三) 十月クーデタ

## (四) 憲法制定議会の強制的解散

## (五) 『国家と革命』の二つのヴィジョンと矛盾

## (六) テロル装置「チェーカー」の創設

## (七) 「プロレタリアート独裁」と赤色テロル

(以下次号)

## 四 左翼全体主義——スターリン主義体制

## 五 中国——毛沢東「大躍進政策」の悲劇と文化大革命の狂気

- 六 北朝鮮全体主義とその残骸
- 七 カンボジア—ボル・ポト政権の虐殺政治
- 八 共産主義的全体主義独裁制の二〇世紀

### 三 左翼全体主義——レーニンと十月クーデタ

(一) はじめに

二〇世紀の共産主義体制の政治犯罪を記録し分析した著書『共産主義黒書』の編集者・執筆者であるステファヌ・クルトワは、ボリシェヴィキの「テロルの真の原動力」は「レーニン主義のイデオロギー」と、「現実と完全にずれた教義を適用しようというユートピア的な意志」とにあった、と分析している。<sup>1)</sup>

ここで言うレーニン主義のイデオロギーとは、(一) 階級闘争、歴史の助産婦としての暴力、歴史の意味を担う階級としてのプロレタリアートといったマルクス主義の初歩的概念、(二) 労働組合主義による自然発生的意識では社会主義意識は形成できないという、『何をなすべきか』(一九〇二年)で展開した社会主義意識の「外部注入論」と、軍隊的規律をもつ職業革命家からなる革命政党という構想、(三) 「帝国主義戦争の内戦への転化」による革命的祖国敗北論と世界ボリシェヴィキ革命の神話、からなる。

ボリシェヴィキ勝利とソヴィエト権力の発展に関する西洋の古典的な説明においては、「機械仕掛けの神」は党組織と規律というボリシェヴィキの秘密の武器にあった。その武器庫はレーニンの『何をなすべきか』の思想であ

った。この思想によってボリシェヴィキ党は結成された。そして二月革命後の行動まで決定したのである。この中央集権的な党組織と厳格な党規律というボリシェヴィキの伝統が、新しいソヴェト体制を抑圧的な権威主義に導き、後のスターリンの全体主義独裁制をもたらした。

レーニン主義政党は、具体的な生身のプロレタリアートではなく、形而上学的プロレタリアートを代表していた。こうして前衛党が代行するプロレタリアートの独裁によって、社会生活も個人生活も党によって政治的に統制、抑圧される。生身の労働者や農民たちは、革命のために党の指示に従って動く操り人形にすぎなくなる。唯物史観の公式に反して、意識は社会経済的な下部構造（土台）の反映ではなく、自覚的な意識「イデオロギーこそが社会主義建設の土台であり、労働者も農民も職人も官吏も知識人も意識改造を通じて社会主義社会の下部構造の構築に努めなければならぬ」とされた。<sup>②</sup>

レーニンは、ドイツの「十月」が挫折し、ヨーロッパ・世界革命に関するレーニン主義理論が破綻した結果、ボリシェヴィキのみが無秩序の極にある後進ロシアを相手に取り残される事態となった。彼は、ロシアは社会主義への道に入る用意が整っており、すみやかな成果を挙げようというユートピア的意志を実行するために、絶対的権力を確保したいと望んだ。そのためにテロルが日程にのぼったのである。テロルに訴えることにより、権力を保持し、理論のイメージにあわせた社会を作り変えることが可能になるし、生存そのものによって日々理論の空虚さを非難してやまない人々に沈黙を押し付けることができた。そして、「権力の座についたユートピアは殺害を生み出すユートピアとなった」のである。クルトワは次のように述べている。

「レーニンが樹立した独裁体制はすぐさまテロリスト的で血なまぐさいものであることが明らかとなった。そ

のとき革命的暴力は、もはや状況対応的な暴力、数か月前に消滅したツァーリズム勢力に対する防衛反応の様相を示すことをやめ、能動的な暴力となった。この暴力こそが粗暴で残忍な古くからのロシア文化を目覚めさせ、社会革命の潜在的な暴力性をかきたたてたのである。赤色恐怖政治は〈公式には〉一九一八年九月二日に開始されたことになっているが、じつは〈テロルに先立つテロル〉がすでに存在していた。一九一七年十一月以降、レーニンは計画的にテロルを組織していたのだ。しかも、他の諸政党や社会の諸構成要素から、公然たる反対の意志が全然表明されていなかったにもかかわらず、である。一九一八年一月四日にレーニンは、ロシア史上初めて普通選挙で選ばれた立憲議會を解散させ、街頭で抗議した議會のメンバーに向かつて発砲させたのであった。<sup>3</sup>

ロシア革命の勃発、とりわけボリシェヴィキによる権力の獲得は、真の社会主義的教義と真の「歴史の意味」を解読するレーニンのイデオロギーが不可謬であることの異論の余地のない確証であると思われる。一九一七年の後、彼の政策と理論は〈福音書〉の言葉と同じとなった。イデオロギーはドグマに、絶対的・普遍的真理になった。この神聖化の直接的な帰結こそ、共産主義のテロル全体主義であった。単一政党制を命令したのも、イデオロギーと政治の絶対的真理への格上げだったし、テロルを正当化したのもこの格上げだった。また、個人・社会生活のあらゆる側面への監視と侵入を権力に強いたのもこの格上げだった。

全体主義の特徴は、国家と社会の境界を取り去り、諸個人や組織の自由な時間・空間の場としての市民社会を消し去り、国家に吸収しようとしたことである。この点では、共産党独裁のほうが、ナチズムよりもはるかに精緻にして完全な全体主義体制を作りあげた。共産主義的全体主義体制（レジーム）は、社会の多様性と個人の自由な考えや道徳、信仰、好みを禁止し、それに反するものを容赦なく弾圧した。そのために、暴力は党と国家に集中され、

この〈党有〉(国有)化された暴力は社会の隅々まで監視網を広げた。その過程で全体主義レジームは、垂直的な監視と処罰のシステムだけでなく、水平的な相互監視のシステムを作り上げた。

自由主義の政治思想家J・グレイは、現代政治・社会理論の中心のカテゴリとしての全体主義概念は有効性と妥当性を持つという立場から全体主義概念そのものの再検討を行っている。彼によれば、全体主義の計画は、いかなる歴史的社会にも存在する利益、目的、価値の多元的対立を根絶してしまうような国家と社会を融合した新しい体制という単一の目標によって構成されている。つまり、多様な価値・信念を持つ個人と社会が共存し、法の支配によって保護された自律的諸制度の領域としての市民社会の完全な抑圧という計画である。J・グレイは、この計画の恐ろしさは全体主義権力内の人々のアイデンティティを作り直す(「人間改造」というもう一つの途方もない計画を含むことである)といっている<sup>4)</sup>。

その嚆矢はレーニンの率いた一九一七年十月のクーデタ(いわゆる「十月革命」)であった。階級意識の外部注 入論や職業革命家集団による権力奪取、数的にはきわめて弱体であったロシア・プロレタリアートといった現実にもかかわらず、レーニンはプロレタリアートの代表であると宣言することによって自分のイデオロギーの正しさを確認しようとした。プロレタリアという言語象徴の操作・利用は「レーニン主義の欺瞞」の一つである。「昨日イリツチは階級としてのプロレタリアートは(ロシアには)存在しないと断言した。存在しない階級の名において独裁を行うことに賛辞を述べさせてください!」(労働者出身のポリシェヴィキ指導者、アレクサンドル・シュリャーブニコフ)言葉と現実のこのような乖離を可能にする言語の抽象化こそ、テロルを生み出した要因である。それはヨーロッパと中国から北朝鮮、ボル・ポト、キューバにいたる第三世界のあらゆる共産主義レジームに見られる。社会も人間も具体的な厚みを失い、共産主義の歴史的・社会的な組み立て玩具のパーツでしかなくなるのである。

テロルは、生身の人間ではなく「ブルジョア」、「人民の敵」を殺すのである。歴史の恩寵のために。

絶対的・普遍的真理に格上げされたイデオロギー（ドグマ）によって基礎づけられた絶対的・恣意的な権力行使を、レーニンはマルクスに倣って「プロレタリアートの独裁」と名づけた。カール・カウツキーはいち早く（一九一八年夏）、この独裁の目標が対立する意見を論駁することではなく、その表明を暴力的に禁圧することであり、ひいてはそのような意見の持ち主を抹殺することであると批判した。レーニンは直ちに、独裁はいかなる法によっても縛られない権力であり、プロレタリアートの独裁は、人口の圧倒的多数を占める被搾取者・勤労者の利益のためにブルジョアジーを粉砕することを目的としている暴力であって、「プロレタリア民主主義」の実現にほかならないと弁証した。

だが内戦においてテロルの真の姿が現れた。白軍に対する赤軍の内戦には、もう一つの戦争、ずっと規模が大きく、ずっと意味深い戦争が隠されていた。それは労働者世界の重要な部分と農民の大きな部分に対する赤軍の戦争であった。労働者と農民は、一九一八年夏以降、ボリシェヴィキ支配に耐えられなくなりつつあった。スターリン治下になると、この戦争は党・国家を社会総体と対決させるであろう。公開された公文書に基づく近年の研究によれば、一九一八年から二十一年のこの「汚い戦争」（ニコラ・ヴェルト）こそ、ソヴェエト体制の「真の母胎」であった。ボリシェヴィキと同盟した社会革命党左派で、一九一八年五月まで司法人民委員を務めたイサーク・シユテインベルクはのちに、ボリシェヴィキ権力を「首尾一貫した国家テロルの制度」と語った。<sup>5)</sup>

ソヴェエトは革命以来、双面神ヤヌスのように正反対の方向を向いた二つの顔を持っていた。未来を照らす社会主義国家の顔と全体主義のテロル国家の顔である。前者は史上初の「労働者の国」になり真に民主的平等を実現するといふ触れ込みで、ロシアだけでなく世界の希望の星となった。後者は国民全員をその内面をも含めて徹底的に

管理し隷従させることを体制の基本原理とする恐怖の国であった。ソヴィエトの輝かしい成功に酔いしれる人びとがいた一方、二十世紀の悪夢の実験に戦慄する人びともいた。共産主義の崩壊と冷戦の終結によって「戦争と革命の世紀」としての二〇世紀の幕が閉じたとき、この二つの顔には必然的な関連性があったのかという問題があらためて提起された。マーチン・メイリアがいうように、ソヴィエトの実験は社会主義国であったにもかかわらず全体主義国になってしまったのか、それとも社会主義国であったがゆえに全体主義国になったのか、という問題である。<sup>6)</sup>

レーニンと十月クーデタに端を発する共産主義的全体主義支配のボリシェヴィキ体制について、西側の進歩的知識人は「人類の進歩の到達点」として称賛した。それはテロル政治がその頂点に達したときであった。一九三四年、労働党員でロンドン大学教授のハロルド・ラスキはソ連を訪れた後、「人類の歴史上、ソ連体制ほどの水準の完成を遂げた事例はいまだかつてない」と述べた。一九三五年、フェビアン協会のウェップ夫妻は『ソ連共産主義―新たな文明』を書き、素朴にもスターリン主義体制を称揚した。アメリカの文芸批評家E・ウィルソンは、「ソ連において、私はまるで光が決して輝きを失うことのない道徳的聖域にいるかのような心地がした」とさえ書いた。彼らは、自身のユートピア幻想をソ連に投影して無邪気に賛美したのである。<sup>7)</sup>

彼らは、ソ連の中央集権的な計画経済による平等と富裕の体制を夢想したが、大規模な国民経済を計画・管理する（神の見える手）の非現実性に目を閉ざし、レーニンが「プロレタリア独裁」の「科学的定義」で明らかにしたような、権力の集中に対するいかなる制度的チェックも存在しないことの恐ろしさを無視した。また、人間の生と価値の多様性を否定して調和的社会的理想（無葛藤・無矛盾社会 non-conflict society）を強制するとき、巨大な集権権力を所有する党は、強制された生のヴィジョンを共有しない多数の人間を、暴力を用いても従わせようとしたという事実にも盲目であった。宗教、民族、家族、伝統・習俗、芸術（文学・音楽・絵画・舞踊・工芸・建築）な



ど人間と社会のアイデンティティを支えるものが否定され破壊されたときどうなるか、代替宗教としての共産主義イデオロギーに酔った進歩的知識人の貧困なる想像力はそれを理解することができなかった。それ(暴力による理想社会の実現)はユートピアの誘惑である。カール・ポッパーが「ユートピア社会工学」と呼んだものである。<sup>(8)</sup>

旧ソ連国内でよく言われていたように、ソヴィエト社会は「鏡の中の世界」、つまり欧米資本主義国の近代性を逆さまに映し出す鏡であった。マルクスがヘーゲル観念論批判において用いたレトリックのように、上下あべこべの世界であった。ソヴィエト体制においては、イデオロギーや政治は「上部構造」ではなく、体制の「土台」であった。ソヴィエト社会経済制度は「党」という土台から副次的に生まれた社会であった。ソヴィエトの悲劇は、この逆立の構造を人類の進歩の名のもとに無理強いし、批判する者やほみ出す者を弾圧し排除したことから生じた。逆立構造の「土台」である党のイデオロギーは、建前の上では正義、平等、平和を謳ったためにそれだけ悲劇を増幅してきた。「大罪を生むには大きな理想がいるというパラドックス」の見本であった。<sup>(9)</sup>

注

- (1) ステファヌ・クルトワ「なぜだったのか?」、『共産主義黒書 コミンテルン・アジア篇』、恵雅堂出版、二〇〇六年、三四五頁。
- (2) Sheila Fitzpatrick, *The Russian Revolution*, Oxford University Press, 2008, p. 31.  
マーチン・メイリア(白洲英子訳)『ソヴィエトの悲劇 ロシアにおける社会主義の歴史一九一七〜一九九二』草思社、一九九七年、一四四―五頁。(Martin Malia, *The Soviet Tragedy: A History of Socialism in Russia, 1917-1991*, The Free Press, 1994.)
- (3) メイリア、前掲書、三四三頁。
- (4) John Gray, *Post-Liberalism: Studies of Political Thought*, Routledge, 1993, p. 160. John Gray, *Black Mass: Apocalyptic Religion and the Death of Utopia*, Allen Lane, 2007. J・トレイ(松野弘訳)『ユートピア政治の終焉』岩波書店、二〇一二年、五二頁。トレイが

言うように、全体主義をその他の弾圧的体制から区別する重要な基準は「人間の生をつくり変えようとする試み」であり、国家権力を用いて「社会をつくり変える」試みはその副産物である。共産主義体制は、人間性をつくり変えるというユートピア的理想の追求の中で設立された。ソ連、中国、東欧、北朝鮮、ポル・ポト支配のカンボジアなどすべて共産主義体制を押し付けられた国々が、異なった歴史と伝統をもつにもかかわらず構造的類似性を示したのはそのためである。大規模弾圧を行ったこれらの共産主義諸国は歴史的背景も発展段階も異なるが、「その唯一の共通点は、それがユートピアの実験の対象であったという事実にある。テロ装置——みせしめ裁判、大規模投獄、そこら中にいる秘密警察を通じて政治的、文化的生活の国家的管理——はあらゆる共産主義体制の中に存在していた。モンゴル、東ドイツ、キューバ、ブルガリア、ルーマニア、北朝鮮、ソ連領中央アジア、こうした国々はすべて似通った弾圧を経験した。」

全体主義の基本構造は、党Ⅱ国家体制、集権的命令経済システム、政治警察、検閲とイデオロギー教育などから構築されたが、重要な事実は、全体主義のこの骨格は党の末端組織の指導体制を通じて機能し続けたことである。一九八九—一九九一年のソ連・東欧共産党政権の崩壊はソヴィエト研究の根本的再検討を強いたが、その中核は全体主義概念の復活であった。東ヨーロッパ諸国は、西側の研究者が捨てた全体主義概念をそのような総合的なシステムをさす言葉として用いた。全体主義的支配は不可能であるという西側の研究者の意見について、マーチン・メイリアは次のような洞察をもって反論している。「共産主義者にとって『全体主義』とは、国民全員を事実上徹底的に管理するような制度（そんなことは不可能である）ではなく、そのような管理を制度の基本的目標とすることを意味した。これは、制度がその機能において全能であることを意味するのではない。むしろ、その制度的構造のなかで全能の権限を与えられていることを意味する。」

- (5) クルトワ、前掲書、三五二頁。
- (6) マーチン・メイリア、前掲書『ソヴィエトの悲劇』一五頁。
- (7) Webb, Sidney and Beatrice, *Soviet Communism: A New Civilization?*, Longmans, Green and Co., 1936. Nekrich and Heller, *Utopia in Power: The History of the Soviet Union from 1917 to the Present*, Summit Books, New York, 1986, p.257. M. Heller, *Cogs in the Soviet Wheel: The Formation of Soviet Man*, Collins Harvill, 1988, pp. 9-10, 23-24, 31-41, 147-209etc.
- (8) カール・ポッパー（内田詔夫・小河原誠訳）『開かれた社会とその敵——第一部 プラトンの呪文』未来社、一九八〇年、第九章。

(9) マーチン・メイリア、前掲書『ソヴィエトの悲劇』、一九頁、二三頁。「プロレタリアによる十月革命という神話」は逆立していた。「支配力」を持っていたのは、「社会的階級」ではなく「独立変数」としての党と政府であった。同、一九四頁。また同書、第二章の「レーニンとボリシェヴィキ」、一三〇頁以下を参照されたい。

## (二) 二月革命

十月クーデタ（いわゆる「ロシア革命」）をもたらしたのは、第一次世界大戦の容赦のない現実であった。それは前例のない戦争であった。すべての交戦国が国民全員を前線に送るか、銃後でそれを支える仕事に動員した。あらゆる資源が戦争に投下された。ロシアは、この「総力戦」に一千万人を動員した。それはペトログラードとモスクワを合わせた人口四〇〇万の三倍弱にあたるが、バルト海から黒海まで三〇〇キロ以上の前線に配置された。すでに一九一七年時点で三〇〇万人の死者を出していた。これほどの犠牲にもかかわらず、ロシア軍は敗北を重ね、国土の西側部分のかなりを失った。国内経済も、大量の生産人口の戦時動員やバルト海と黒海の港の閉鎖による穀物と資源の輸出停止、産業設備や消費財など必需品の輸入停止、それに歳入不足を補うための紙幣の増発によるインフレの加速によって混乱を極めた<sup>1)</sup>。

戦況は惨憺たるものであった。死者、負傷者、捕虜は増大し続け、逃亡兵、負傷者の群れ、群衆が食糧を求めてロシア中心部に向かう道路に溢れ、都市へ流れ込んでいった。政府は全く無力であった。都市は避難民を受け入れる能力はなかった。群衆は軍事的失敗を重ねる政府に絶望していた。経済状況も悪化した。軍事需要への転換によって消費財が不足し、物価は上昇した。農民は売った物の見返りがありません、生産縮小に追い込まれた。軍隊への動員によって農民が土地から引きはがされたことも生産減少に拍車をかけた。食糧も消費財も不足し、価格が高騰

した。こうして都市労働者だけでなく、中産階級も官吏層も、一九〇五年の第一次ロシア革命のときには決して近づくかなかった反乱と革命運動に加わる気配を見せていた。ロシアに投資していた外国資本もロシアの自由主義ブルジョアジーも、君主政の維持よりも政体の変更の方が利益になるのではないかと考え始めていた。<sup>2)</sup>

この危機的状况においても、皇帝は非常時を口実に国会（ドゥーマ）を開催せず、自由主義的反体制派の支持を得ることなく戦争を遂行しようとした。自由主義反対派はカデット（立憲民主党）から保守派まで「進歩プロック」を形成し、国民の支持に基づく政権をつくるための憲法を要求した。敗戦のさなか経済が破綻する中で憲法問題が表面化した。

この革命で決定的な役割を果たしたのは軍服を着た農民であった。帝政府を無力化したのは命令を拒否した農民兵士だったからである。この反乱の中、憲政の危機は頂点に達した。警察から地方政府機関に至るまで、国家の権力は徹底的に崩壊した。<sup>3)</sup>

二月二十五日、ペトログラードでの食糧要求デモや労働者のストに対して、皇帝が「軍隊の力で暴動を鎮圧せよ」という命令を発したとき、一九〇五年と一九一四年以来何度も起った散発的な混乱は革命に移行した。二六日朝、騎馬警官隊や守備隊が配置され、労働者のデモ隊がネフスキー通りやズナメンスカヤ広場など町の中心地に到着したとき砲撃が開始され、一五〇人以上が殺された。二十六日夜から二十七日にかけて、「兄弟である労働者」に発砲したことを悔やんだヴォルインスキー連隊はじめペトログラードの守備隊の兵士と若い士官たちは反乱を起こした。勝敗は決した。労働者デモ隊は兵器廠を襲撃し、郵便局、駅、電話局を占領し、政治犯監獄のペトロパブロフスク要塞をはじめ監獄を攻撃した。解放された犯罪者や反乱兵士は武装して商店を略奪し、労働者は皇帝の像や肖像画、ロマノフ王朝の紋章を破壊した。

「群集の墮落した暴力」(マクシム・ゴリキー)による混乱に不意打ちを食らったメンシエヴィキ、エスエル(社会革命党)、ポリシエヴィキ、トルドピキ(勤労派)など革命諸政党は、二〇〇五年の第一次ロシア革命に倣って「労働者代表ソヴィエト臨時執行委員会」を組織した。翌日、工場の労働者と守備隊の兵士に代表者を選ぶよう呼びかけた。選ばれた六〇〇人近くの代表者が会議を開き、プロの革命家たちを執行委員に選んだ。同じ頃、皇帝の解散命令を拒んだ帝国議会(ドゥーマ)の議員たちは、秩序の回復のために諸機関と交渉を行う「臨時委員会」を設立した。ソヴィエト臨時執行委員会は兵士を兵舎に帰すべく臨時委員会と交渉した。その結果、「兵士の権利章典」といわれる「命令第一号」という基本文書がまとめられ、選挙によって諸部隊の兵士委員会を設立すること、すべては労働者・兵士ソヴィエトと委員会の決定に従うこと、士官と兵士の呼称の変更などが定められた<sup>1)</sup>。

社会の混乱を憂慮するドゥーマ臨時委員会と権力を行使する用意のないソヴィエトとで長時間にわたる裏交渉が行われた。その結果、ソヴィエトは一定の条件付で、憲法制定会議が召集されるまでの間、カデット(立憲民主党)の代表者が率いる臨時政府が正当な権力機関であることを認めることとなった。その条件は、基本的人権を明示した民主的な政策要綱、普通選挙の実施、身分・民族・宗教による差別の禁止、警察に代る民兵の創設、市民である兵士の権利を認めること、政治犯の即時大赦である。しかし、講和か戦争かの問題と土地問題は触れられず、一九一七年の政治的争点として残された。これらは、三月二日の合意で生まれた臨時政府とソヴィエトとの二重権力体制を悩ます基本的問題となった。カデットを中心とする臨時政府は議會制を目指し、ロシアを近代的で自由な資本主義国家に変えようと考<sup>5)</sup>えていた。

臨時政府の主導権はカデットが握った。エスエルのケレンスキーを除いて、社会主義者はいなかった。この政府は最初から社会主義勢力の人質であった。この社会主義勢力が「ペトログラード・ソヴィエト」あるいは「労働

者・兵士代表会議」である。この「街頭の権力」は兵士と労働者によって自発的に生まれたが、メンシェヴィキのインテリ社会主義者の働きかけによるものだった。二月革命後、「ソヴィエト」はロシアの都市部全域で形成され、六月には第一回ソヴィエト全国会議が開かれるほどであった。夏までには、農民の間にも作られた。二月革命は「ブルジョア」臨時政府と社会主義「ソヴィエト」の「二重権力」体制であった。

ドゥーマは、民衆の運動と連携した自由主義ブルジョアジーの意志を代表していた。ソヴィエトを支配していたメンシェヴィキなどの社会主義者は、ロシアの革命の最初の段階はブルジョア革命であるという理論に従っていた。ドゥーマの委員会とソヴィエトの執行委員会によって設立された臨時政府の閣僚の大部分は自由主義者であったが、革命を実行し革命の力を保持していた民衆の監視と統制に服さなければならなかった<sup>6)</sup>。

二月革命当初の昂揚のなかでは、政治的解決は容易であると思われていた。ロシアの将来の統治形態は民主的なものである。民主主義という曖昧な用語の正確な意味も、ロシアの新しい憲法の性格も、国民によって選出された憲法制定議会によって決定されるであろう。自由主義的政治家や有産階級と専門職階級、将校団などのロシアのエリートと、社会主義的政治家や都市の労働者階級、下級兵士や水兵などの民衆は、しばらくは、一九〇五年革命の栄光の日々に示された国民の革命的連帯と同様に共存するであろう。制度面では、新しい臨時政府はエリート革命を代表し、復活したペトログラード・ソヴィエトは民衆革命を代表するであろう。両者は相互補完的であり、「二重権力」は弱さではなく強さの源泉になるであろう。ロシアの自由主義者は、伝統的に、社会主義者の社会改革への関心は自分たちの政治的民主化への関心と両立可能であり、同盟者として受け入れる傾向にあったが、ロシアのほとんどの社会主義者も自由主義者を同盟者としてみる用意ができていた。なぜなら、まずブルジョア自由主義革命を達成すべきであり、専制政治との闘争においては彼らを支持すべきであるというマルクス主義の見解を受

け入れていたからである。<sup>(7)</sup>

設立されたばかりの臨時政府は、戦争遂行という重要問題に方針を出さなければならなかった。臨時政府の外交担当大臣ミリュコフは、連合国に対してロシアの戦争目的は不変であると宣言した。ソヴィエトの穏健左派は、「併合も賠償も伴わない講和」を求めた。戦争継続の国際的義務を順守すると約束したミリュコフも、世論の圧力を受けて「民族自決権に基づく永続的平和の確立」を宣言した。こうして臨時政府とソヴィエトは、戦争目的を共有した。<sup>(8)</sup>

当初ソヴィエトを構成する指導部はほとんど、マルクスの歴史図式に従って二月の出来事を、西欧型民主主義体制を確立するロシア・ブルジョア革命と捉えていた。四月のレーニンのペテログラード到着がこの妥協を劇的に変えた。レーニンは現下の課題がロシアにおけるブルジョア革命であり、それ以上ではないという戦略を激しく攻撃した。

ペトログラードに帰還したレーニンは、演説で臨時政府への支持を直ちに拒否すること、ボリシエヴィキがソヴィエトを支配することを要求した。「ツェレツェーリ（臨時政府閣僚）とチヘイゼ（ペトログラード・ソヴィエト議長）が説くソヴィエト民主主義は現実の内戦による講和にも革命にも到達することができない。（……）日和見主義者たち、社会愛国主義者たちによって指揮されるソヴィエトは、ブルジョアジーの道具でしかありえない。ソヴィエトが世界革命に貢献するようにするためには、ソヴィエトを征服しプロレタリアートのものとしなければならぬ」と主張した。<sup>(9)</sup>これは、首都のボリシエヴィキ組織の再建に取り組み、中央委員会ロシア事務局を設立したモロトフやシリャーブニコフらが発表していた穏健な宣言と真つ向から対立するものであった。その宣言では、「革命臨時政府」創設の呼びかけ、普通選挙による憲法制定会議の招集、労働者同志による平和への呼びかけ、大



地主の所有地の没収といった民主主義的な改革を要求していた。これはカーメネフやムラノフ（機関誌『ブラウダ』を掌握）らの立場、すなわち、二月革命はブルジョア革命であり、それゆえ臨時政府が革命を代表するという見解と一致していた。

四月四日、統一を宣言するためにすべての党派の社会主義者を集めた集会で、レーニンは臨時政府を激しく攻撃し、革命の新たな局面への全面的移行を主張して統一の計画をぶち壊した。すなわち、戦争の即時停止、臨時政府の否認とすべての権力のソヴィエトへの移行、正規軍の廃止と民兵による代替、大所有地の没収と土地の国有化、すべての銀行の単一全国銀行への統合と労働者ソヴィエトによる統制、ソヴィエトによる生産と分配の管理である。出席者の大部分は、レーニンの演説に対して憤慨した。そして「狂人のうわごと」（ボクダーノフ）を軽蔑し、その非現実性を嘲笑した。

レーニンも反撃した。「現在の革命におけるプロレタリアートの任務について」（『四月テーゼ』）を『ブラウダ』に持ち込んだ。それは四月四日の集会での「個人的テーゼ」に解説的注釈をつけたものであった。彼は繰り返し、「労働者代表ソヴィエトはただ一つ可能な革命政府の形態」であり、「労働者代表・兵士ソヴィエトがなければ、（臨時政府が約束した）憲法制定議会の召集は保障されないし、その成功は不可能だ」と主張した。このテーゼに対するポリシエヴィキの反対は極めて強かった。翌日、ペトログラード党委員会が審議のために開催され、採決の結果は反対一三、賛成一、棄権一という圧倒的なものであった。一〇日後の全ロシア党会議では、レーニンは群衆の街頭権力と呼応して精神的に説得した。戦争に関する決議では、一四九人の議員のほぼ全員の賛成、すべての権力をソヴィエトへとというアピールは一三二票の賛成を得たが、社会主義革命への即時移行に関する決議では七一票に終わった。党名を、裏切りの同意語である「社会民主主義」から「共産主義」に変えるという提案も否決さ



れた。<sup>(10)</sup>

レーニンの武器は、「すべての権力をソヴィエトへ」というスローガンであった。すでに論文「遠方からの書簡」でレーニンは、ソヴィエトをバリ・コミューンと同一視して、「プロレタリアートと住民のもっとも貧しい部分との利益を代表する労働者の政府」と定義していた。マルクス主義によってソヴィエト制度に歴史的根拠を与えたが、彼のいうソヴィエトの実態は党によって浸透され、党の意志を表現する組織であった。綱領では、普通選挙で選ばれた憲法制定会議を人民主権による決定機関としていた。十月以降、決定機関はソヴィエトか、それとも憲法制定会議かの問題を巡って、レーニンと党全体との間で亀裂が生じることになる。だが四月以後数か月間、レーニンは臨時政府が憲法制定会議のための選挙を遅らせていると攻撃した。それでいて「すべての権力をソヴィエトへ」というスローガンを叫び続けた。<sup>(11)</sup>

六月三日から二十四日まで、第一回全ロシア・ソヴィエト大会が開かれた。講和の展望も見えない中で軍の不満が増大し、戦争の苦しみにより都市の騒擾が激化し、農村での暴動が頻発し、臨時政府がますます孤立する中で開催だった。ポリシエヴィキはなお少数派であった。投票権を持つ代表八二人のうちポリシエヴィキの代表はわずか一〇五人でしかなく、二八五人のエスエル（社会革命党）、二四八人のメンシエヴィキのはるか後塵を拝していた。だがポリシエヴィキは、どの党にも属していない代議員に対して精力的にプロパガンダを展開した。<sup>(12)</sup>

大会はいくつかの重要な決議を行った。規約を制定すること、三か月ごとに会議を開くこと、総会から次の総会までの間に活動する常設機関の「全ロシア中央執行委員会」を選出することであった。議場に溢れる兵士や水兵の圧力にもかかわらず、選出された二五〇名の中央執行委員のうち、ポリシエヴィキはわずか三五人にすぎなかった。大会は臨時政府への信任を評決し、権力をソヴィエトへ移すことを要求するポリシエヴィキの決議案を否決した。

ソヴィエトでは非力であったレーニンは街頭の実力を利用した。六月九日、ボリシエヴィキ党と工場委員会は「平和的デモ」を呼びかけるピラを出した。スローガンは平和的どころか、「臨時政府の打倒」、「全権をソヴィエトへ」と訴えるもので、いくつかのペトログラード駐留の連隊も武装して参加すると予告していた。チハイゼ（ペトログラード・ソヴィエト議長、メンシエヴィキ）やツエレットエーリ（閣僚、メンシエヴィキ）は全ロシア大会に警告をならし、レーニンはクーデタを扇動していると非難した。<sup>(13)</sup>

翌日、ソヴィエトが開かれ、メンシエヴィキはデモに関する厳密な規則の制定を要求した。ソヴィエトのみがデモを許可する権限を持つとされた。またツエレットエーリは、ボリシエヴィキとそれが操る集団の武装解除を求め、それに従わない場合は合法性を剥奪することを要求したが、同じメンシエヴィキのスポークスマンのマルトフが反対した。メンシエヴィキは、ほどなくしてツエレットエーリの予言が正しかったことを知らされることになる。

この時点で臨時政府が考えていたことは、平和の回復であった。連合国側に無併合による講和を働きかけたが失敗していた。そうしたなか、陸海軍相ケレンスキーは交戦国に対して大攻勢をかけるという危険な賭けに出た。大攻勢の直前には脱走兵が急増し六月十日から十七日の一週間で一〇万人以上にのぼった。十八日、ロシア軍は数百キロにわたる地域で攻勢をかけ、最初はオーストリア・ハンガリー軍を相手にいくつか勝利したが、七月二日ドイツ軍の反撃によってロシア軍は混乱のうちに後退を余儀なくされた。二週間で四〇万人が死傷して捕虜となり、前線は一〇〇キロから二〇〇キロメートルも後退した。

首都ペトログラードの守備隊では緊張が高まっていた。政府が、一万人の兵士と千人の機関銃兵からなる第一機関銃連隊を前線に送るといふ決定を下したからであった。この連隊は労働者街ヴィボルグに駐屯し、ボリシエヴィキの軍事的な砦といえる存在であった。七月三日、連隊は命令を拒み、守備隊の多くの部隊が「全権力をソヴィエ

トへ」移すよう行動に移った。労働者のデモ隊に合流して街路を埋め尽くした。四日、クロンシュタト要塞の数千人も水兵が、武装蜂起に勝利するためにボリシェヴィキ党本部に向かった。この「七月事件」のさなか、ボリシェヴィキは明確な指導を行えなかった。優柔不断と相反する指令を繰り返すばかりだった。レーニンは六月二十八日、臨時政府が「ドイツ皇帝のスパイ」で秘密資金を供与されたという資料を用意していることを知って、フィンランド国境の村に逃れていた。四日に首都に戻ったレーニンは労働者と兵士の蜂起に対して、全権力をソヴィエトにという雄弁を吐くことができなかった。七月蜂起の直前、政府はボリシェヴィキの活動を停止させる決定を下していた。レーニンの国家反逆を証明する書類を入手した政府は、ボリシェヴィキ指導者を逮捕した。ケレンスキーは国家反逆罪の資料を報道する命令を出したが、メンシェヴィキを含めてソヴィエトの多数派はこれに反対したために、レーニンとボリシェヴィキは汚名を免れることができた。<sup>14)</sup>

武装蜂起事件の結果、ボリシェヴィキの優柔不断ぶりが浮き彫りになり、政府は優位に立ったように思われた。レーニンと彼の党は破綻し、メンシェヴィキと社会革命党（エスエル）と臨時政府が影響力を発揮して安定が訪れるかに見えた。七月二十五日、ケレンスキーを首班とし、社会主義者が多数を占める第二次連立内閣が組織された。だが連立は二週間しかもたなかった。

七月九日、首都を脱出したレーニンは、中央委員会に対して新しい戦略を説明しようとした。それはレーニンが主張し、党が承認した「四月テーゼ」の戦略を真っ向から覆すものであった。これまで、「すべての権力をソヴィエトへ」というスローガンの下、臨時政府とそれに参加しているメンシェヴィキとエスエルを非難するよう指示してきた。それがペトログラードでの「七月の日々」を経て、いまや「ロシア革命の平和的発展への望みはすべて消滅」し、「ソヴィエトは反革命を隠すイチジクの葉」となったとの認識を示して、「武装蜂起」の組織化と「革命政

府」の結成に全力を注ぐべきだといのである。だが、中央委員会は、戦略の根本的転換を提案したレーニンの「七月テーゼ」を拒否した<sup>15)</sup>。

ケレンスキー首相にとつてますます困難が大きくなっていった。農民は土地を収奪しつつあり、兵士は東部戦線から脱走しつつあり、労働者は工場を接収しつつあった。工業生産は混乱し、食糧供給は急激に低下していた。ドイツ軍は北部戦線で進撃していた。このような状況を踏まえて、レーニンはボリシェヴィキ党中央委員会に対し、なぜ臨時政府の存続を許しているのかと訴えた。臨時政府はブルジョア階級の独裁権力であると精神的に批判した。七月二十六日・八月二日、ボリシェヴィキ党第六回大会が開かれ、「すべての権力をソヴェエトへ」というスローガンを放棄した。

## 注

- (1) ニコラ・ヴェルト(遠藤ゆかり訳)『ロシア革命』創元社、二〇〇四年、所収、一五三―一五五頁。
- (2) H・カレルル・ダンコース(石崎晴己・東松秀雄訳)『レーニンとは何だったのか』藤原書店、二〇〇六年、二四七―八頁。
- (3) マーチン・メイリア、前掲書『ソヴェエトの悲劇』、第三章。
- (4) 「命令第一号」、ニコラ・ヴェルト(遠藤ゆかり訳)『ロシア革命』創元社、二〇〇四年、所収。Cf. G. F. Hudson, *Fifty Years of Communism: Theory and Practice 1917-1967*, Penguin Books, 1971, pp. 54-55.
- (5) ニコラ・ヴェルト、前掲書『ロシア革命』、四五―四八頁。ダンコース、前掲書『レーニンとは何だったのか』、二五三頁。
- (6) ダンコース、前掲書、二五三頁。G. F. Hudson, *op. cit.*, p. 57.
- (7) Sheila Fitzpatrick, *The Russian Revolution*, Oxford University Press, 2008, p. 39.
- (8) ダンコース、前掲書『レーニンとは何だったのか』、二五四頁。チューリッヒに亡命していたレーニンは、革命の勃発に驚愕した。彼は、何が起こったのか詳細は分からなかったが、今後どうすべきかの計画は出来上がっていた。問題はどのようにしてロシアへ帰還するかであった。スウェーデン経由で帰国するためにはドイツを通らなければならなかった。レーニンの敗戦から

革命へという敗北主義構想は、ドイツの戦争戦略にとつて有意義であつた。三国同盟にとつて、ロシアとの単独講和が実現すれば、戦争努力を西部戦線に振り向けることが可能になるからであつた。利害は一致した。レーニンにはドイツのスパイという嫌疑を避けるために、治外法権付の車両を要求した。ドイツはレーニンの要求を認め、講和と革命のプロバガンダのための多額の資金を提供した。「権力奪取こそ唯一の目標」であつたレーニンは、そのための行動資金が必要だつた。David Shub, *Lenin, The New American Library*, p. 105. タンコース、前掲書、二五八頁。

(9) タンコース、前掲書「レーニンとは何だつたのか」、二六一―二頁。E・H・カー(塩川伸明訳)『ロシア革命 レーニンからスターリンへ、一九一七―一九二九』岩波現代文庫、二〇〇〇年、四頁。

(10) レーニン「現在の革命におけるプロレタリアートの任務について」『全集』二四卷、三九頁。タンコース、前掲書「レーニンとは何だつたのか」、二六四頁、二六八頁。Merle Fainsod, *How Russia is Ruled*, Harvard University Press, 1953, p. 64.

手稿「四月テーゼ擁護のための論文または演説の腹案」でレーニンは、「革命は現段階ではブルジョア革命であり、だから『社会主義的実験』は必要ない」という党内外の「ブルジョア的な判断」を粉砕し、「二重権力から労働者代表ソヴェートの全権力へ導かなければならない」と書いている。『全集』二四卷、一五―六頁。また同卷所収の「二重権力について」、「ルイ・ブラン主義」、「戦術にかんする手紙」、「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」、「ロシアの諸政党とプロレタリアートの任務」等も参照。

(11) レーニン「遠方からの手紙」、『全集』二三卷、三二七―三七八頁。

(12) タンコース、前掲書「レーニンとは何だつたのか」、二七五頁。

(13) レーニン「労働者・兵士代表ソヴェート第一回全ロシア大会 一 臨時政府に対する態度についての演説」、二 戦争についての演説」、『全集』二五卷、三三―一頁。

臨時政府は、ソヴェートに有効に対処することができなかった。五月初めに連立内閣が組織された。エスエル党员、メンシェヴィキ、無所属社会主義者それぞれ二名、計六名の社会主義者が入閣した。最新資料に基づく研究によれば、レーニンは他の政党とはけた違いの資金を持っていた。それはドイツから支給された金であつた。豊富な資金で多様な新聞発行活動を行い、プロバガンダを展開することができた。ドミートリー・ボルゴノフ(白須英子訳)『レーニンの秘密(上)』NHK出版、一九九五年、一九二頁以下。レーニンのもう一つの武器は工場委員会であつた。労働組合はメンシェヴィキによって支配されていたので、ボリシェヴィキはこの委員会の内部でプロバガンダに専念した。

(14) Cf. M. Fainsod, *op. cit.*, pp. 69-72; David Shub, *op. cit.*, pp. 107-116. タンコフ、前掲書『レーニンとは何だったのか』、二七九-二八七頁。ニコラ・ヴェルト、前掲書『ロシア革命』、八四頁。

(15) M. Fainsod, *op. cit.*, p. 70.

(三) 十月クーデタ

八月二十八日に「コルネーロフ事件」が起こった。ケレンスキーは、七月に最高司令官に任命されたコルネーロフ將軍の人氣が高まるなか、彼が「フランス革命の幕を引いた」ボナパルチストのブッチ」(クーデタ)を計画していると誤解した。コルネーロフは、ポリシェヴィキの蜂起に備えてコサック二個師団と第三騎兵軍団をペトログラードとモスクワの等距離の地域に展開させていた。ケレンスキーは、將軍が反革命の軍事クーデタを計画していると誤解し、前線部隊のペトログラードへの移動延期を命令した。コルネーロフとクルイモフを先頭とする將軍たちは混乱が深まるなか、ケレンスキーには統治能力はないと判断し、産業資本家との合意の上で騎兵師団を率いてペトログラードに進撃した。臨時政府の運命は総司令官コルニコフの手中に握られていた。パニックに陥ったケレンスキーは、ポリシェヴィキを含むソヴェエトの諸政党に支援要請し、兵士に臨時政府に従うよう説得してコルネーロフを拘禁した。このコルネーロフ反乱で最も得をしたのはポリシェヴィキであった。再び合法的な政治の舞台に登場し、全国のソヴェエトで力を増した。<sup>1)</sup>

ポリシェヴィキの七月蜂起の失敗で、当面はケレンスキー臨時政府を支持せざるをえないと感じていたレーニンは、八月末のコルネーロフの反乱で権力奪取の機会が近づきつつあると判断した。反乱はロシアを統治するのはコルネーロフ、ケレンスキー、レーニンのうちの誰かという問題を突きつけた。コルネーロフは軍事独裁政権、警察、

軍隊、コサックと立憲民主党の代表と見なされ、ケレンスキー政権はエスエルやメンシェヴィキの優位を認めることになると思われた。

ケレンスキーは九月一日(十四日)、左翼政党との連帯を示し、一方的に憲法制定議会を待たずにロシア共和国を宣言した。九月十四日(二十七日)、ペトログラード・ソヴィエト執行委員会はすべての社会主義政党、自由主義政党の代表からなる「民主勢力会議」(「民主主義会議」)を招集して、第三次連立政権を形成することになった。閣僚に一〇人の社会主義者と四人の自由主義者が迎え入れられた。同会議はまた、ロシア共和国臨時評議会(「予備議会」)の設立を決め、憲法制定議会が開かれるまで各政党の見解が反映されるようにした。この連立政権によって、ケレンスキーはボリシェヴィキのクーデタを避けようとした。レーニンは予備議会のボリシェヴィキ代表団に参加をポイコットするよう迫っていたが、七七票対五〇票の差でジノヴィエフ・カーメネフ派がレーニン・トロツキー派に勝った。

レーニンは興奮状態になって、矢継ぎ早に論文と手紙を書き、中央委員会に指示を出した。彼にとって革命と権力以上に神聖なものではなかった。蜂起はきつと成功する、とうとう念願の権力を奪取する時期が来たと確信した。九月末「危機は熟している」という論文でレーニンは、「危機は熟している。ロシア革命の将来全体がかけられている。社会主義を目指す国際労働者革命の将来全体がかけられている。危機は熟している」と繰り返した。かれは「革命的な転換期」が来ていると判断した根拠として、第一に、ボリシェヴィキは「両首都の労働者・兵士代表ソヴィエト」を味方に行っていること、第二に、土地問題が深刻化し農民ロシアで農民蜂起が広がっていること、第三に、フィンランドの部隊やバルチック艦隊が「政府から完全に離反した」こと、またモスクワ区議会選挙(九月二十五日)で、一万七千人の兵士のうち一万四千人がボリシェヴィキに投票したこと、第四に、鉄道従業員



と通信従業員が政府と激しく対立していることを挙げている。レーニンはこのような「革命の転換期」にあるロシアは「ドイツにおける海軍の反乱」と革命的労働者の動きにみられるように「国際プロレタリア革命の門口」に立っている、と強調した。<sup>(3)</sup>

そしてレーニンは繰り返し、現下の「全国的危機の成熟」にあつて、なお「立憲的幻想のわな」にかかつて「憲法制定議会の召集を信じる」者（カーメネフ、ジノヴィエフら）や、「ソヴィエト大会を待つべきである」として蜂起に反対する者（トロツキー）は、プロレタリアートと農民に対する裏切り者であるとして激しく攻撃した。レーニンによれば、「ソヴィエト大会を待つのは権力の掌握を不可能にする愚行」であつた。

レーニンは、論文「危機は熟している」のなかの中央委員会向けに限定された第六章で六つの根拠を挙げて、「いまなら、ボリシェヴィキは、蜂起の勝利が保障されている」と訴えた。(一) われわれはペトログラード、モスクワ、バルチック艦隊の三地点から、ふいに攻撃できる。(二) われわれは、われわれに支持を保障してくれるスローガンを持っている。地主に対する農民の蜂起を弾圧する政府を倒せ、というスローガンである。(三) われわれは全国で多数派である。(四) メンシェヴィキとエスエルの崩壊は確実である。(五) 「われわれはモスクワで権力を掌握する技術的可能性を持っている。(敵の不意を打つために、モスクワで口火を切ることもできるだろう)。(六) われわれは、ペトログラードに「幾千の武装した労働者と兵士」をもっており、彼らは「冬宮をも、参謀本部をも、中央電話局をも、すべての大印刷所をも、一挙に占領する」ことができる。軍隊内では平和の約束と土地分配の煽動を行う。こうしてレーニンは、客観情勢はわれわれに有利であるとして、中央執行委員会に対して「一挙に、ふいに攻撃する」クーデタを迫つたのである。<sup>(4)</sup>

レーニンが激しく攻撃した中央委員会の「待機」派（憲法制定議会選挙を経て権力を獲得する、あるいはソヴィ



エト大会を待つ)は、非暴力的手段でも勝ち目があると踏んでいたのであろう。カーメネフやジノヴィエフら中央委員会内の慎重派は、上記の「民主主義会議」と第三次連立政権、ロシア共和国臨時評議会(予備議会)の設立といった状況を踏まえて、ボリシェヴィキの武装蜂起ではなく「制度による革命」の可能性に賭けようとした。

レーニンは激怒してこの議会から脱退せよと迫った。レーニンは亡命先のフィンランドから、「七月事件」の教訓から革命的合法主義の路線を取る中央委員会に対し、繰り返し武装蜂起を促した。彼は中央委員会宛てに「ボリシェヴィキは権力を握らなければならない」(九月十二日)と「マルクス主義と武装蜂起」(九月十四日)という二通の手紙を出し、「ペトログラードとモスクワのソヴィエトで多数派になった以上、ボリシェヴィキは権力を得ることが可能であり、またそうしなければならぬ」と主張し、即時講和と農民への土地分配によって、ボリシェヴィキの強力な政府を樹立することができる」と述べた。予備議会に参加するだけでは、ボリシェヴィキはただ「チェスの駒を演じる」ことに甘んじることになるであろう。「選挙の数字に欺かれてはならない。問題は選挙にはない」のだ。「ボリシェヴィキが反論の余地のない多数派になるのを待つなどということは馬鹿正直なことだ。(略)いまわれわれが権力を握らなければ、歴史はわれわれを許さないであろう」とつけ加えた。

レーニンは「マルクス主義と蜂起」という手紙で、ボリシェヴィキの武装蜂起を「ブランキ主義」だとする批判に対して、単なる「陰謀や政党に依拠する」のではなく、革命の前衛であり人民の前衛である「先進的階級」に依拠し、「人民の革命的高揚に依拠」した蜂起はブランキ主義ではなく、「マルクス主義」本来の「戦闘術」であると強調しつつ、「全権力を革命的プロレタリアートにひきいられる革命的民主主義派の手にただちに移すことが必要」と強調した。そして蜂起の際には、「諸国民に平和を、農民に土地を、けしからぬ利潤の没収、資本家のけしからぬ生産破壊の抑制というわれわれの綱領的な計画」にそった簡潔な声明をだすことが不可欠であると述べた。こ

の手紙の末尾で、レーニンは蜂起の具体的な「戦闘術」を次のように描いている――

「われわれは一瞬間もむだにしないで、蜂起部隊の司令部を組織し、兵力を配置し、最も重要な個所に忠実な連帯を派遣し、アレクサンドル劇場を包囲し、ペテロパウロ要塞を占領し、参謀本部と政府の要人を逮捕し、士官学校生徒と野蠻師団にたいしては、敵を市の中心部へ進出させるよりは死をえらぶ覚悟のある部隊を派遣しなければならぬ。われわれは武装した労働者を動員し、彼らに最後の必死の戦闘を呼びかけ、すぐさま電信局と電話局を占領し、中央電話局にわれわれの蜂起司令部をおき、それとすべての工場、すべての連隊、すべての武装闘争地点とを電話でむすびつける、等々しなければならぬ。<sup>6)</sup>」

中央委員会はレーニンの手紙を討議したが、大半は懐疑的であった。なぜ、十月二十日の第二回全ロシア・ソヴェト大会を待てないのか、その大会でポリシエヴィキは多数派になるのは確実なのだから、すべての権力はソヴェトに移るであろうというのである。だがレーニンは、ソヴェト大会の採決で権力を握った場合、連立政府になるのを恐れていた。メンシエヴィキや農村と軍隊に支持があるエスエル（社会革命党）と権力を分かち合わなければならぬ、だからその前に蜂起し権力を奪取しなければならないと主張した。そうすれば、他の社会主義政党は抗議してポリシエヴィキと対立せざるを得なくなり、結果としてわれわれが全権力を掌握することになるという権謀術数であった。

十月初め、レーニンは労働者に変装してペトログラードに入り、十月十日（二十三日）に中央委員二人のうち一二人を集めて秘密会議を開いた。彼らの多くは、「権力の擬合法的な移行」を達成するためには、ソヴェト

での有利な立場を利用すべきであると考えていた。だがレーニンは一〇人の賛成を得て蜂起の説得に成功した。ジノヴィエとカーメネフは憲法制定議会を待つべきだと反対を貫いた。「クーデタによって権力をとるのは無責任だし、ポリシェヴィキのみで権力を維持できると考えるのも非現実的である」と考えた。

カーメネフは、あくまでも決定に同意することを拒否した。会合のあと二人は「このような問題は十人やそこらの人間で決められることではない」と党外で発表し、その翌日、「(一) われわれはすでにロシア国民の過半数を味方にした、(二) また国際プロレタリアートの過半数を味方にしたといわれているが、残念ながらどちらも真実はない。それが大問題なのだ」と述べた。<sup>(7)</sup>

十六日(二十九日)、再び中央委員メンバー二人が集まった。守備隊の報告によれば軍隊は中立の態度であり、労働者の士気は衰えていた。ジノヴィエフとカーメネフはクーデタ延期の動議を出したが、賛成は六人のみであった。レーニンは激怒し二人の除名を要求した。カーメネフは中央委員を辞任した。<sup>(8)</sup>

トロツキーの回想によれば、中央委員会はクーデタ反対派のジノヴィエフとカーメネフ、なんとしてもソヴィエト大会前に蜂起を求めるレーニン、大会から蜂起の命令を取り付けたとするトロツキーの三つのグループに分かれた。トロツキーは十月二十五日に設定されたソヴィエト大会で権力の問題を決定すべきであると主張した。「労働者と軍隊は日程どおりに正々堂々と準備されたこの大会を支持するであろう。」大会は蜂起に正統性を付与することを期待した。レーニンはこれに激しく反対した。「十月二十五日は敵の目をごまかす煙幕として役立つぐらいなものだ。だが蜂起はそれ以前にソヴィエト大会と無関係に着手されなければならない。党は武装した手で権力を取り、しかる後にソヴィエト大会について語るがよい」と。<sup>(9)</sup>

ペトログラード・ソヴィエトは、すでに「軍事革命委員会」を設置して一五万人の兵士を配下に入れていた。そ

これは臨時政府によるペトログラード守備隊の移動命令に伴って、首都の防衛と革命の防衛のためにソヴィエトによって設立されたものであった。首都の守備のために住民を動員することが目的だった。ところがボリシェヴィキは中央委員会が設置した軍事革命本部をこれに合流させ、事実上クーデタの司令部として蜂起の準備に利用した。政権の合法的機関はこの委員会に対して何の権限も持たず、唯一ソヴィエトの執行委員会（イスボルコム）が軍事的全権を有することとなった。この軍事装置の創設それ自体がすでにまぎれもないクーデタにほかならなかった。こうして蜂起の司令部をソヴィエトによって「合法化」しようとした。レーニンは軍事組織上層部に、ことを急げとせき立てた<sup>10</sup>。

ペトログラード軍事革命委員会の司令官アントノフ・オフセーエンコのペトログラード・ソヴィエトへの報告（十月二十三日）では、ボリシェヴィキの蜂起と権力奪取の準備は、ドイツに対して首都を守る攻撃的防衛のためであるという装いのもとで行われた。「ボリシェヴィキは首都防衛の旗のもとに権力に忍び込んだ。」こうして「権力奪取の準備は、ボリシェヴィキ軍事革命委員会全ロシア・ビューローによって舞台の背後で行われた」のである。こうしてクーデタの装置が動き始めた<sup>11</sup>。

ボリシェヴィキ蜂起の寸前、ケレンスキーは孤立無援であった。守備隊のユンケル（士官学校生徒）もそっぽを向いた。コルニーロフ反乱鎮圧後クルイモフ將軍に自殺を勧告したことで、ペトログラードにいた四万五千の將校、士官候補生に憎まれていた。ケレンスキーは、武力による抵抗を組織するために首都を出てコッサク師団を呼び集めようとしたが、彼が招集できたコッサク小隊は地元のボリシェヴィキ部隊によって武装解除されてしまった。

ケレンスキーの帰還を待っていた冬宮は、ペトロハヴロフスク要塞から撃ち込まれた約三〇発の警告射撃の砲弾のうち二発しか届かず、誰も怪我さえしなかったが、武装していない立憲民主主義者たちはなすすべがなかった。

冬宮になだれ込んできたのは、ポリシエヴィキ軍隊の革命家集団ではなく、雑多な群衆であった。日付が変わった深夜、冬宮は反政府分子の手に落ちた。政府閣僚は軍事革命委員会司令官ヴラジミール・アントーノフ・オフセーエンコに逮捕された。ポリシエヴィキ軍隊が駅、橋、発電所、郵便局、電信局などを占拠した。

レーニンは、二十五日に開かれる第二回全ロシア・ソヴィエト大会が臨時政府の転覆を既成事実として宣言できるようにしようと懸命であった。彼は自分が支配するポリシエヴィキ党の単独権力の樹立を目指していた。いまやレーニンとポリシエヴィキの関心は、トロツキーが開会を遅らせていたスモリーヌイ学院のソヴィエト大会に移った。大会の構成はポリシエヴィキが優勢であった。代議員総数六五〇人のうち三五〇人を占め、これに百人近くのエスエル左派がいた。これにはあるカラクリがあった。ソヴィエトの全国大会が誠実に選出されれば、ポリシエヴィキが少数派になることはほぼ確実であったので、トロツキーと彼の副官は多数を確保するための工作を行った。ペトログラード・ソヴィエト執行委員会（イスパルコム）のみが大会を招集する権限を有していたが、彼らはポリシエヴィキと左派エスエルからなるもっともらしい「北部地方委員会」を設置して、ポリシエヴィキが多数を占めるソヴィエトと軍の部隊の代表を二倍、三倍に増やした。「これは、正統なソヴィエト組織に対する紛れもないクーデタ」であり、イスパルコムは厳しく非難した。「他のどの委員会も、大会召集のイニシヤチヴを自らに引き受ける機能も権限も有していない。北部地方委員会は、地方ソヴィエトのために定められたあらゆる規制を侵犯し、専横にでたらめに選ばれたソヴィエトを代表しているのであるから、なおさら、この権限が北部地方委員会に属することはあり得ない。」<sup>12</sup>

イスパルコムの社会主義者たちは、ポリシエヴィキのとる手順に強く反対したが、しかし結局、屈服した。社会主義閣僚の逮捕に対してはエスエル左派の一人が抗議したが、トロツキーはそのような些事にかまっている時間は

ないと厳しく答えた。二十五日昼頃、トロツキーが議長を務めてソヴィエトの臨時会議が開かれ、「臨時政府が打倒された」と宣言した。

ボリシエヴィキの蜂起による権力掌握は労働者階級の名において行われたが、それは全くの作り話であった。実際は、労働者階級をさしおいてボリシエヴィキ党が政権を横領したのであった。レーニンの戦術は、メンシエヴィキ、社会革命党が前夜の事件に憤慨して大会から退場するように仕向けることであった。少数派の立場に置かれたメンシエヴィキとエスエル右派は、各所で起っている暴力行為を批判し、武力の脅威の下では大会を続行することはできないと宣言して退場した。ペテルブルグ・ソヴィエト議長トロツキーは、「諸君の役割は終わった。さあ、諸君にふさわしいところへ行きたまえ、歴史の屑かごの中へ」と勝ち誇った軽蔑の言葉を投げつけた。こうしてボリシエヴィキは絶対多数となり、蜂起の承認を得た。

翌日(二十六日)、大会はレーニンを議長とする最初のソヴィエト政府「人民委員会議」(ソブナルコム)を樹立した。多くのソヴィエト代表にとっては、これは驚くべきことであった。なぜなら、ボリシエヴィキは労働者・兵士・農民ソヴィエトへの権力の移行を要求していたが、その論理からすれば、臨時政府にとって代わるのは、ソヴィエトのよって選出され、多くの政党の代表を含む「ソヴィエト中央執行委員会」であるはずだからである。メンシエヴィキの指導者マルトフは、新政権は暴力や軍事行動なしで生み出されるべきだと主張した。メンシエヴィキとエスエル党右派は、ボリシエヴィキのクーデタを非難し、新しい民主政権の形成について臨時政府とただちに話し合うべきであることを要求した共同宣言を読み上げた。<sup>13)</sup>

これまで首都のソヴィエトの代弁者は全ロシア・ソヴィエト中央執行委員会(VTSIK)であったが、レーニンの最初の仕事はこの中央執行委員会をボリシエヴィキ化することであった。形式的には二〇世紀末の一九九一年十二

月までその役目を果たし続けた最高立法機関の仕事は、レーニンの人民委員会議（政府）と共産党政治局による布告を乱発することであった。つまりソヴィエトは、見かけ上は党の「民主的」な道具として利用された。

権力を奪われた勢力は、クーデタの三日後、予備議会で抵抗を呼びかけた——臨時閣僚会議はボリシエヴィキの武力によって仕事を中断することを余儀なくされた、暴力によって権力を奪った現政権は「自由と共和国」を溺れさせ、「人民と革命の敵とみなされるようになる」であろう。参謀総長ドゥホニン將軍は、軍隊に臨時政府に変わらぬ忠誠を尽くし、ボリシエヴィキの暴力を阻止しよう訴え、国を救う唯一の組織として憲法制定会議の開催を求めた。

二十五日午前一〇時に、レーニンはペトログラード労働者・兵士ソヴィエト軍事革命委員会の名で次のような「革命の宣言」を起草した。

「ロシア市民へ」

臨時政府は打倒された。国家権力はペトログラード労働者・兵士代議員ソヴィエトの機関である軍事革命委員会の手中に移った。この委員会はペトログラードのプロレタリアートと兵營の先頭に立っている。

人民がこれまで闘ってきた大義——民主的平和の即時提案、富農の土地財産の廃止、生産の労働者管理、ソヴィエト政府の創出——、この大義の勝利が確保された。

労働者、兵士、農民の革命万歳！<sup>1)</sup>

レーニンはペトログラード・ソヴィエト緊急集会で演説し、ソヴィエト権力の任務について次のように報告した。



「同志諸君！ボリシエヴィキが常にその必要を説いてきた労働者と農民の革命が実現された。

この労働者と農民の革命はどんな意義をもっているであろうか？なによりもまず、このクーデタ (perestroika) の意義は、ブルジョアジーがどんな形でも参加することのない、われわれ自身の権力機関、ソヴィエト政府をもつだろうというところにある。被抑圧大衆自身が、自分で権力を作り出すであろう。旧国家機関は根本的に粉砕され、ソヴィエト組織という新しい統治機関が作り出されるであろう。」<sup>15</sup>

だが、ボリシエヴィキ党全体とくに中央委員会の中には全社会主義政党的の連立政権を歓迎するという強い意見があった。中央委員会に復帰したカール・メネフがそれを代弁した。権力の行使の問題をめぐる党内の危機は、ソヴィエト大会が始まった時にすでに予見されていた。レーニンによって予告された政府を他の社会主義勢力にも開放することを要求するメンシエヴィキのマルトフの決議案は代議員の圧倒的多数で可決されていた。ボリシエヴィキのルナチャルスキーは、討論の中でマルトフの提案を断固支持すると述べた。カール・メネフ、ジノヴィエフ、ルイコフ、シリヤープニコフ、リヤザノフ、ボグダーノフ、クラシン、ゴリキークらボリシエヴィキの大物がすべての社会主義者の連合政府を支持した。

軍隊や食糧輸送の強力な権限をもつ全ロシア鉄道労働者組合執行委員会 (Vizhd) もボリシエヴィキの権力拡大に反対した。ボリシエヴィキと政府から排除された社会主義政党的との交渉が開始されなければあらゆる鉄道輸送をストップすると圧力をかけた。<sup>16</sup> また十月二十八日には、ロシアのボリシエヴィキ化に衝撃を受けた公共機関と銀行のホワイトカラーもストに突入した。レーニンは、行政機関の麻痺と鉄道員組合の暴力的な圧力、そして党内の批判にさらされて、譲歩を余儀なくされた。ヴィクジェーリのスト突入の脅迫のもとで、ボリシエヴィキとさまざま



まな左派組織の代表者による会議が開かれた。第二回ソヴィエト大会で中央執行委員会議長に選出されたカーメネフは、レーニンとトロツキーの排除を前提とした連立政府樹立の方向へ議論が進むよう力を注いだ。レーニンはこれに反撃して、中央委員会に対して、社会主義者たちとの連立政府の交渉は問題にならない、妥協を排除してボリシェヴィキの単独政府を貫徹することを宣言した<sup>17)</sup>。

だが彼は、反レーニンの同盟が実現する危険を恐れて、外面的な妥協策を提案した。それはソヴィエト中央執行委員会を組合と農民ソヴィエトと軍の代表に拡大することを受け入れるとともに、政府がこの中央執行委員会に従属するという原則に同意するというものであった<sup>18)</sup>。単独政府は維持しつつ、時間を稼いで中央執行委員会に対する党の支配を強化することができるという判断だった。ヴィクジュエリはこの措置では不十分として、ボリシェヴィキの政府からの全面撤退を要求した。この危機を回避するため、カーメネフはレーニンを辞任させ、エスエルのヴェクトル・チュルノフを後任とする案を提出した。レーニンは激怒して中央委員会を招集し、連立政府の形成をめぐるあらゆる交渉を打ち切ることを提案したが、一〇対三で否決された。この危機を乗り切るため、トロツキーはエスエル左派とのみ交渉するという折衷案を提案して可決された<sup>19)</sup>。

あくまでも《権力の独占》を要求するレーニンは、出版の自由を禁止する政令を出して《意見の独占》をも要求した。一か月ちょっと前、彼は「憲法制定議会の成功をいかに確保するか」と題する文書において、「ブルジョア社会」では出版は「巨大資本主義企業」の「私的広告」によって成り立っており搾取者の自由でしかないと批判し、「ソヴィエトに代表される国家権力はすべての印刷所とすべての紙を取り上げて、それを公正に分配する」と述べていた。そしてこの「出版の自由」は「憲法制定議会の選挙」の成功のためには不可欠の条件であるとさえ主張していた<sup>20)</sup>。彼は権力を得るや否や、「反革命的報道」の自由を禁圧する文書を書いた。そこには次のように書かれて

いる――

「資本の圧迫からの勤労者の解放と不可分に結びついているこの目的を実現する第一歩として、臨時労働政府は、定期刊行物と資本のつながり、その資金と収入の源泉、資金拠出者の顔ぶれ、その欠損の埋め合わせ、総じて新聞の全経営を調査する審査委員会を任命する。帳簿、決算報告書その他の記録文書を、審査委員会に隠すことも、意識して不正直な証言を行うことも、いずれ、革命裁判所によって処罰される。」<sup>①</sup>

中央委員ユーリ・カリーンは、報道の自由を禁止する政令の停止を求める動議を出した。中央委員会はわずかに票差の過半数でこれを否決した。カーメネフ、ジノーヴィエフ、ルイコフ、ミリューチン、ノギーンは中央委員を辞任し、後三者は人民委員を辞職した。カーメネフは執行委員会議長の座を離れた。レーニンは後任にスヴェルドローフを任命した。明らかに党は分裂していたが、レーニンは分裂を認めず、彼らを除名し、「肅清」して危機を脱しようとした。

穏健な社会主義派は中央執行委員会の論争から手を引いた。彼らは憲法制定議会の成立を待つことを選んだ。この十一月に時点で、社会主義者たちは素朴にも、レーニンは普通選挙で選出された議会の決定には従わざるを得ないはずだと信じていた。残ったのはエスエル左派のみであった。彼らはレーニンの権力独占の意志を攻撃したが、いくつかの人民委員ポストの提示と中央執行委員会の拡大という提案をのんだ。レーニンはソヴナルコムに非ポリシェヴィキがいるのは束の間に過ぎないと考えていた。また中央執行委員会の拡大（一〇八名から三六六名へ）は、逆に権力の集中を強化するのに役立つことを知っていた。委員会は饒舌の輩の集まりとなり効率性のないものとな

ただだけでなく、新たな農民代表と兵士代表は互いに異質な要求や意見を出して立法府の代わりとなるどころではなかった。そのため中央執行委員会の最高幹部会が事実上の権力の保持者となった。幹部会はエスエル左派七議席に対し、ボリシエヴィキは一二議席を占めた。レーニンは、行政権と立法権を手に入れた。毎日開かれる人民委員会議（ソブナルコム）の議長レーニンは、先に述べた『国家と革命』の内矛盾を革命権力の集権化という形で「解決」した。

レーニンは十月クーデタのあいだ、「革命の偉大な雄弁家」としてではなく、舞台裏で戦略を練り同志を鼓舞することに全力を注いだ。二十六日の会議で新しいソヴィエトの政府、人民委員会議（ソブナルコム）の成立が発表された。レーニンが議長、外務人民委員トロツキー、民族人民委員スターリン、農業人民委員ヴラジミール・ミリュートインらが任命された。レーニンは大会に提出する政令を起草した。最初の布告は、「民主的講和」と即時休戦の全交戦国への呼びかけ、土地の私的所有の廃止と農民への即時分配を規定した「土地に関する布告」であった。「平和についての布告」では、ヨーロッパ社会主義革命を公然とは要求しなかった。交戦国の人民だけではなく「帝国主義的」政府にも即時停戦を呼びかけた。「土地についての布告」では、貴族・王室・教会の土地所有を廃止するが、収用された土地を処分する機関はどれか、土地委員会なのか農民の共同体ミールか、それとも農民ソヴィエトか明確にしなかった。だが私的な土地所有は、おそらく農民の土地を含めて永遠に廃止すると定められた。<sup>20</sup>

今や新政府には戦争の終結、反対派の抑圧、財政機構の崩壊、経済危機、食糧危機、国民各層の反対、旧政権の官吏の協力拒否の問題など片付けねばならない事案が山積していた。保守派や自由主義陣営では、一―三週間もすればボリシエヴィキには統治能力がないことが明らかになると思っていた。もし西欧諸国だったらボリシエヴィキは政治と行政に未熟なために失敗したであろう。しかし、「ロシアでは未熟だということが権力の維持に役立つ」

のである。<sup>23)</sup>

## 注

- (1) 「コルニエーフ事件」についての迫真の分析は、リチャード・パイプス（西山克典訳）『ロシア革命史』成文社、二〇〇〇年、第六章「十月のクーデタ」を参照。Cf. S. Fitzpatrick, *op. cit.*, p. 61.
- (2) この経緯についてはヴォルコゴノフ、前掲書、『レーニンの秘密(上)』、二五〇頁。ダンコース、前掲書『レーニンとは何だったのか』、三〇一―二頁、三〇三頁。
- (3) レーニンは、九月一二日、党中央委員会、ペトログラード党委員会、モスクワ党委員会へ手紙を書き、「モスクワとペトログラードの双方で直ちに権力を掌握すれば、われわれは絶対的に、そして疑いの余地なく勝利するであろう」と訴えた。レーニン「ボリシェヴィキは権力を掌握しなければならぬ」、『全集』二六卷三六頁。党中央委員会は、レーニンはロシアで何が可能かつかんでいない、党の安全に対して無責任であるとして提案を拒否した。参照、レーニン「危機は熟している」、『全集』二六卷、七一頁。
- (4) 同、七〇―二頁、73頁。
- (5) レーニン「マルクス主義と武装蜂起」、『全集』第二六卷、七頁。
- (6) 「マルクス主義と蜂起」『全集』二六卷、一三頁。
- (7) S. P. Melgunov, *The Bolshevik Seizure of Power*, pp. 10-11; S. Fitzpatrick, *op. cit.*, pp. 62-3. ロバート・サーヴィス（河合秀和訳）『レーニン(下)』岩波書店、二〇〇二年、七六頁。
- (8) S. P. Melgunov, *op. cit.*, 13-16. レーニン「ボリシェヴィキ黨員への手紙」、「ロシア社会民主労働党中央委員会への手紙」、『全集』二六卷、二二七―二三二頁。この会議における委員の発言内容についてはS. P. Melgunov, *op. cit.*, pp. 12-16. 十月十五日のペトログラード党委員会の会議でも、十月十六日の党中央委員会でも軍事組織代表のネフスキーやキリレンコ、著名な経済学者ミリューチンらは蜂起延期や反対、あるいは蜂起の可能性を訴えた。
- (9) トロツキー（森田成也訳）『レーニン』光文社古典新訳文庫、一五一―三頁。
- (10) レーニン「同志への手紙」、『全集』二六卷、一九四―二二七頁。「フィンランド陸海軍・労働者地方委員会議長への手紙」、

『全集』二六卷五九一六〇頁。ダンコース、前掲書『レーニンとは何だったのか』、三二〇頁。メリグーノフは一連のレーニンの論文・手紙を（その語彙と文体を含めて）考察して、それは一種の妄想のようで、「全般的に天才的預言者というより狂信的で、歴史的な視座や自分たちの行動の道義的責任感に欠けている」と評している。S. P. Mejunov, *op. cit.*, pp. 19-20.

- (11) S. P. Mejunov, *op. cit.*, p. 34.
- (12) R・バイプス、前掲書『ロシア革命史』、一四九頁。
- (13) S. P. Mejunov, *op. cit.*, p. 82. ダンコース、前掲書『レーニンとはなんであったのか』、三五〇頁。ヴォルコゴノフ、前掲書『レーニンの秘密（上）』、二六四頁。ゲオルグ・フォン・ラウホ（丸山修吉訳）『ソヴィエト・ロシア史』法政大学出版社、一九七一年、六〇頁。S. Fitzpatrick, *op. cit.*, p. 65.
- (14) レーニン『ロシアの市民へ』『全集』二六卷、二四三頁。
- (15) レーニン『ベトログラード労働者・兵士代表ソヴィエトの会議 一 ソヴィエト権力の任務についての報告』、『全集』二六卷、二四四頁。邦訳全集では「クーデタの意義」は「この変革の意義」と訳されている。ロバート・サーヴィス（河合秀和訳）『レーニン（下）』岩波書店、二〇〇二年、八一頁参照。
- (16) S. P. Mejunov, *The Bolshevik seizure of power*, p. 94, pp. 134-6.
- (17) 『ロシア社会民主労働党（ボ）中央委員会の会議における発言』、『全集』二六卷二八〇一頁。
- (18) H・カレル・ダンコース、前掲書『レーニンとは何だったのか』、三五三頁。
- (19) 『中央委員会内の反対派の問題についてのロシア社会民主労働党（ボ）中央委員会の決議』、『全集』二六卷、二八二四頁。『ロシア社会民主労働党（ボ）中央委員会の少数派にたいする多数派の最後通牒』、同、二八五七頁。
- (20) 『憲法制定議会の成功をいかに確保するか』、『全集』二六卷、四〇三一九頁。
- (21) 『出版の自由についての決議案』、『全集』二六卷、二八八九頁。『全ロシア中央執行委員会の会議 一 出版問題についての演説』同、二九〇一頁。
- (22) 『労働者・兵士代表ソヴィエト第二回全ロシア大会』、『全集』二六卷、二四七頁、二六五頁。参照、ロバート・サーヴィス、前掲書『レーニン（下）』、八八頁。
- (23) ゲオルグ・フォン・ラウホ、前掲書『ソヴィエト・ロシア史』、六〇頁。二五二七日の演説でレーニンは『国家と革命』で述べたプロレタリアート独裁の樹立にも、共産主義の実現にも触れていない。正教会聖職者、工業資本家、土地所有農民、自由主

義的知識人に対して彼が生涯にわたって発し続けた言葉も用いていない。人民による人民のための革命を助ける党だと思われるようにし、まだポリシエヴィキを支持していない労働者、農民、兵士、知識人に魅力的に映るように努めた。

山積する課題に対してレーニンの政府は次々と布告をだした。人民委員会議議長としてレーニンは、古い国家機構が崩壊し、新しい組織は原始的かつ無能で立ち往生している状況で、国家、社会、労働者、農民に対する統制をあらゆる病気の万能薬とみた——十月二十六日（十一月八日）、労働者の統制に対する法令草案（怠慢、供給物資や利益などの隠匿は、全財産の没収、および五年間の禁固刑に処する）、十月二十九日、八時間労働日に関する布告、同日、普通教育の布告、十一月二日、分離も含めた民族自決権（諸民族の権利）の宣言、民族的宗教的特権の遺物に反対することをすべての市民に保証、十四日、労働者管理の布告（選挙による委員会の企業経営の監督）、十二月一日、最高国家経済評議会設立の布告、一四日全銀行の国有化、数週間で大規模工場が国有化、出版物に対する統制（一九一七年十二月には非ポリシエヴィキ系の出版社は閉鎖され、レーニンはチュエーカーに「定期および不定期刊行物、写真、映画、青写真、挿し絵……郵便、電信による通信をあらかじめ検閲する」権限を与えた）。参照、ドミートリー・ヴォルコゴノフ、前掲書『レーニンの秘密・上』、二七四頁。

ロシアの危機と統治能力の未熟との関連で、ニコラ・ヴェルトは、ソ連崩壊後の秘密資料に基づいて、「十月革命」はポリシエヴィキの反乱による権力奪取（クーデタ）であると同時に、その底流には二月革命以降の秩序の崩壊と各方面での自主的な社会革命があったと分析している。激しい農民一揆、軍隊の崩壊、「労働者統制」、「権力をソヴィエトへ」という労働者の運動、旧帝国内の各民族の解放運動などである。いわゆる「十月革命」は、ポリシエヴィキのクーデタと民衆のエネルギーとが相重なる形で進行したというのである。（ニコラ・ヴェルト、前掲書『ロシア革命』一〇七頁。）ポリシエヴィキは民衆の願望を利用することによってクーデタに成功するが、後にはこの民衆の要求を拒否し、かれらのエネルギーを抑圧することによって権力を維持しなければならなくなった。

#### （四）憲法制定議会の強制的解散

すでに述べたように、レーニンは「十月革命」を、いわゆる民主主義的同意なるものに委ねようとはさらさら考えていなかった。とりわけ、十一月十二日に設定されていた憲法制定議会の選挙は脅威であると考えていた。憲法制定議会の召集は、二月革命以来、ロシア社会の希望の星であった。臨時政府は、憲法制定会議選挙を九月十七日

(三十日)、会議召集日を九月三十日(十月十三日)と決めていた。その布告は六月十四日(二十七日)に署名され、選挙費用も計上されていた。その後ケレンスキーが首相になって選挙は十一月十二(二十五日)に、会議開催は十一月二十八日(十二月十一日)に延期された。

四月以来レーニンは、憲法制定会議の選挙を早く行うよう主張してケレンスキー臨時政府を批判してきたが、十月の権力奪取後には選挙を延期しようとした。彼はやっと手にした戦利品を憲法制定議会が奪い取るのではないかと恐れた。ボリシエヴィキが支配していたソヴィエトは都市の労働者によって選出されていたが、国民の大半は農民であり、エスエルを支持していた。選挙によって選出された議会は正当性を獲得し、人民を代表する唯一の機関となるであろう。彼は中央委員会議スヴェルドロフやその他の中央委員を脅し、憲法制定議会の選挙の延期を発表するよう圧力をかけた。スヴェルドロフは拒否した。ボリシエヴィキはこれまで憲法制定会議の召集を要求してきたのであって、直ちに延期などできるわけはなかった。同様にトロツキーは、ボリシエヴィキが権力を得しだい、直ちに憲法制定会議を開くと繰り返し約束してきた事実は無視できないとして反対した。<sup>1)</sup>

トロツキーの証言によれば、レーニンは「革命から数時間とまでは言わないが数日以内に憲法制定議会の問題を提起した。」レーニンが憲法制定議会議長の延期を提案したとき党内で支持する者は一人もいなかった。「われわれ自身、臨時政府が憲法制定議会議長の延期していることを非難してきた」からである。<sup>2)</sup>ブハーリンは、「われわれはこの一か月半、憲法制定議会議長の存続することを熱心に主張してきたではないか」と述べた。実際ボリシエヴィキの新聞は、連日「ブルジョアジーが憲法制定議会議長の存続を妨げるのを助けてきたのはメンシエヴィキとエスエルである」と主張してきた。そして、「そのために彼らは反革命的な予備議会議という形式で、民主的な装いを作り出そうとしたのだ」とのべた。ボリシエヴィキは予備議会議を退出するとき、「憲法制定議会議万歳」を叫んで出ていった。



十月反乱の翌日『プラウダ』は、「同志たちよ、あなた方は血をもって、開催が決まっていた全ロシア憲法制定議会の招集を確実にした」との宣言を発表していた。ボリシェヴィキのなかでも地方との結びつきの強い古参のスヴェルドロフは、「地方ではソヴィエト権力についてはほとんど知られていない。もし憲法制定議会が延期されたというニュースが地方に流れたら、われわれの立場はもつと弱くなってしまう」と反対した。<sup>3)</sup>レーニンは一人、「誤りだ、それは高くつくだろう」と反対したが、「延期しない」という決定がなされた。再びトロツキーの証言によれば、レーニンは繰り返し、このような「憲法幻想」に対して、「一日に十回も、無慈悲な革命的テロルの歴史的必然性」を訴えて「革命を守るためには極度に厳しい措置を取らねばならない」と主張した。<sup>4)</sup>

そもそもレーニンは、一九一七年四月テーゼまで、当面の目標は「プロレタリアート独裁」ではなく「労働者・農民の革命的民主主義独裁」であると繰り返し主張した。そのための政治制度として民主主義共和国の樹立を考えていた。かれは一九〇五年に新聞『フベリョード』に論文「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」を寄稿し、ロシアの当面している革命はブルジョアの性格のものであり、いま重要なのは「専制的な農奴制的なブルジョア体制」を打倒して、「共和的・民主的なブルジョア体制」を樹立することである、そうすれば「ブルジョアジーに対するプロレタリアートの闘争の都合の良い舞台」が整うのだと書いた。そして「専制からの譲歩」ではなく「専制の打倒」を望んでいるなら、「一方では、秘密投票による真の普通・直接・平等選挙権を基礎とする憲法制定議会」を招集するような、また他方では、選挙の際に完全な自由を實行しうるような臨時革命政府を、ツァーリ政府におきかえることに努力しなければならない」と強調した。<sup>5)</sup>

だがレーニンにとっては、憲法制定議会の形式が重要なのではなく、一九一五年の「いくつかのテーゼ」で述べられているように、「誰が招集するか」ということであった。プロレタリアートの革命的圧力とそのヘゲモニーのもと



での議会でなければならなかった。ここでは、ブルジョア民主主義の諸要求（普通選挙権、言論・集会・結社の自由など）を最低限綱領として採択したロシア社会民主労働党第二回大会議事録にあるように、普通平等選挙権と政治的自由の公然たる制限が考慮されていた。レーニンは、そしてのちにメンシェヴィキに移るプレハーノフも、もっとも重要なのは、革命勢力が圧倒的多数を占める議会が選挙されるならその議会をフルに利用する、そしてその限りで政治的自由も尊重する。選挙の結果が思わしくないなら、遠慮なく議会を解散し政治的自由も制限する、ということであった。<sup>6)</sup>

四月テーゼで労働民主革命独裁論からプロレタリアート独裁論に移行するに伴って、革命政権の装置も議会主義共和国ではなく「労働者・農民代表ソヴィエト」へと飛躍していった。<sup>7)</sup> 憲法制定議会召集問題についてもレーニンは、「召集すべきであり、しかもなるべく早く召集すべきである」と述べたうえで、しかし、「それが成功し、召集されるための保障はただ一つ、労働者・兵士・農民その他の代表ソヴィエトの数を増やし、その力を強めることだけである。労働者大衆を組織し武装させることが唯一の保障である」という限定をつけていた。<sup>8)</sup>

しかし四月テーゼ以後においても、普通平等選挙権にもとづく憲法制定議会の召集を全く否定したわけではなかった。憲法制定議会召集まで「二か月をあます」九月の時点でレーニンは、四月に憲法制定議会成功の保障としていた「労働者・兵士・農民その他の代表ソヴィエトの数の増加」と「労働者大衆の武装」のためには、なによりも「ロシアの人民の多数者」である「農民の啓蒙」が必要であると強調した。「憲法制定議会の成功は農民の啓蒙にかかっている」として、公然と出版の国有化を主張した。レーニンによれば、いまの「新聞・出版の自由」は「資本家の私有財産と相続権」のための自由であり、「金持ちと大政党」が「情報を独占」し、「人民に対する毒を商う」手段である。それゆえ、「最も抑圧されている無知な農民」を啓蒙するためには、ロシアの「すべての印刷所とす

べての紙」を「ソヴィエトに代表される国家」が徴発し、それを公正に分配することが必要である、それこそが「真の出版の自由」であり、来るべき「憲法制定議会の選挙を『革命的民主主義的』に準備することである」という。<sup>9)</sup> 第二回全ロシア・ソヴィエト大会で可決された「土地に関する布告」でも、「人民委員会議設置令」でも、ともに「憲法制定議会の召集まで」という条件が付けられていた。<sup>10)</sup>

すでに指摘したように、社会主義諸政党はポリシエヴィキの権力を削減するために憲法制定議会に期待を寄せた。十一月に入ると積極的に選挙運動を展開した。とりわけエスエルは農民を動員して、地方で活発な活動した。選挙は十一月十二日(二十五日)に予定されていたが、実施上の都合で二十六日に延期され、会議開催は十一月二十八日(十二月十一日)とされた。この希望の選挙に賭けるロシア民衆の期待は高く、投票率は都市部で六〇%前後、農村部ではそれより高かった。選挙の結果はソヴィエト政府にとって悲観すべきものであった。レーニンの不安は的中した。

十月のクーデタで権力を篡奪したポリシエヴィキは、人民の明確な命令的委任を勝ち取ることを期待していたが、結果はポリシエヴィキがベトログラードとモスクワの中心都市で勝利し、西部戦線の兵士の三分の二の票を得たが、地方では農民の多数の支持をえたエスエルの勝利であった。

ある研究者の計算では、投票総数三千六百万のうち、ポリシエヴィキはわずか九百万票にすぎず、社会革命党は二百万票に達した。議席総数七〇七のうち社会革命党は三七〇議席で単独過半数を獲得したが、ポリシエヴィキは一七五、社会革命党左派四〇、メンシエヴィキ一六、ナロードニキ二、カデット一七、少数民族代表八六、無所属一という結果であった。ダンコースによれば、エスエル四一九議席、ポリシエヴィキ一六八議席、エスエル左派四〇議席、メンシエヴィキ一六議席、カデット一七議席、少数民族九〇議席である。<sup>11)</sup>

普通選挙によって生まれた議会の三分の二は非ボリシエヴィキであり、ボリシエヴィキはレーニンの権力独占に敵対する決定機関と対峙しなければならなかった。非ボリシエヴィキ各党と数多くの労働組合は、新たに選出された議会を守るために「憲法制定議会防衛委員会」を設立した。これは一か月前にボリシエヴィキによる権力独占に反対するために組織された「祖国・革命救済委員会」の後継者であった。重要なことは、臨時政府によって十一月二十八日に召集すると予告されていた議会を何としても開会し、その解散を阻止することであった。

選挙で国民の過半数はレーニン政府に反対の意を表明したが、レーニンはこの事実からある結論を引き出した。すでに十一月八日、ボリシエヴィキのヴォロダルスキー（ペトログラード報道・宣伝・扇動人民委員）はペトログラードの会議で、「たぶんわれわれは、憲法制定議会を銃剣で解散せざるを得ないだろう。もし憲法制定議会で多数派にならなければ、第三の革命が日程に上がるだろう」と予見していた<sup>12)</sup>。その「第三の革命」の第一歩は、議会議度のルールを破壊し、民主主義のプロセスに挑戦するものであった。すでに選挙直前の十一月十日（二十三日）、選挙実施・憲法制定会議召集委員を逮捕していた。理由は、「権力奪取の企て」があるにもかかわらず、召集委員会が、会議開催日を延期しないという布告を発表したためであった。

レーニンはソヴナルコムに対して、当選議員が集まるのが困難であることを理由に議会議開会の延期を提案した。それと同時に、カデット（立憲民主党）を「反革命」活動を理由に非合法化する布告を発した。十一月二十八日（十二月十一日）右派（穏健派）エスエル党員と自由主義派カデットがタウリダ宮殿で憲法制定会議擁護デモを行い、予定通り開催することを企てたが、ボリシエヴィキは武装水兵によって解散させた。その晩、人民委員会議はこの事件を武装蜂起未遂事件と定義し、レーニンはカデット指導部を「人民の敵」として逮捕し、「革命裁判にかける」よう提案した。人民委員会議（内閣）は憲法制定会議召集委員会の無効を決定した<sup>13)</sup>。

十一月二十八日の政令は、「人民の敵」と「反革命」を逮捕し、「革命裁判所」で裁くというテロル政治を内容とするものであった。レーニンは「全権力を憲法制定議会へ」と主張するカデットに対して、「人民の利益を形式的な民主主義に従属させる古い偏見」であと非難し、この「人民の敵」を「フランスの革命家たちが振る舞った」ようにテロルによって叩き潰そうとしたのである<sup>14</sup>。

「人民の敵の党であるカデット党の指導機関の成員は、これを逮捕し、革命裁判所の法廷に引き渡すべきものとする。カデット党がコロニーロフ・カレーデン派の反革命的内乱とつながりがあることにかんがみ、カデット党の特別の監視の義務を地方ソヴィエトに負わせる。本令は、署名の瞬間から効力を発する。人民委員会議長ヴェ・ウリヤノフ（レーニン）」<sup>15</sup>

レーニンにとって、憲法制定会議が文明国への道を歩む議会制の第一歩となるかどうかは念頭になかった。レーニンとボリシエヴィキは、獲得したばかりの権力を失うことを恐れていた。人民の意思に反してでも権力を維持しようとした。社会革命党やメンシエヴィキは議会が開かれるまでの時間を、綱領や提案などの作成に費やしていたが、レーニンは徹底的な扇動によって大衆の支持を得ようとした。しかし労働者もペトログラードの守備隊もこれに呼応しなかったため、赤衛軍とボリシエヴィキ水兵を援助するようラトヴィア狙撃兵一個師団をモスクワから派遣するよう命令した。さらに十二月十一日（二十四日）には党中央委員会に、「憲法制定会議は国民を真に代表するものではない」としてその解散計画を承認させた<sup>16</sup>。

翌十二日、レーニンは「憲法制定議会についてのテーゼ」を発表し、直截に彼の考えを展開した。「ブルジョア

共和国では、憲法制定議会が民主主義の最高形態である」が、社会主義体制への移行、つまりプロレタリアート独裁においては、「労働者・農民・兵士代表ソヴィエト」が「いつそう高度の民主主義制度の形態である。」そして、人民は選挙が行われた時には、「十月革命の規模と意義」を十分に知ることができなかつたから、「憲法制定議会に選ばれた議員の構成」は「選挙人の大多数の意志」と一致していないという驚くべき詭弁を弄した。この不一致から生じた危機を「苦痛のない仕方で解決する唯一の機会」は、「人民が憲法制定議会の議員を改選する権利でできるだけ早くまた速やかに行使すること」であり、憲法制定議会が「ソヴィエト権力とその政策」を無条件で承認することであり、それに反対する者に対しては「精力的」で「断固とした革命的措置」とると脅迫した<sup>17)</sup>。

この驚くべき詭弁に基づいて、レーニンは憲法制定議会を召集して、その場でボリシエヴィキによってすでに承認されている基本方針を認めさせることに決めた。つまり召集してすぐに解散させる戦術である。彼はトロツキーに語った。「ソヴィエト権力による憲法制定会議の解散は、革命的独裁の名において形式的な民主主義を完全に、堂々と粉砕することになるからだ。」トロツキーは、人民委員会に「ソヴィエト権力に対して悪態や中傷を書きためるブルジョア出版物に監視の目を強化する」動議を提出した。これは「真実の道へのイデオロギー的障害物」となる検閲制度のはじまりとなった。こうして、選出されたばかりの憲法制定会議は、その開会前に死刑を宣告されていたのである。<sup>18)</sup>

ボリシエヴィキが少数派に終わった選挙結果をうけて、レーニンは憲法制定議会の解散を決意したが、それは、「革命的独裁の名においての形式民主主義の完全かつ公然たる清算」であつた。その解散をレーニンは、「ソヴィエト権力」(ボリシエヴィキ)か、それとも「憲法制定議会権力」(エスエル、メンシエヴィキ、カデット)かの最終的闘争と捉えたのである。<sup>19)</sup> 再びトロツキーの証言によれば、レーニンは最も労働者比率の高いラトビア歩兵連隊の

一つをペトログラードに派遣させ、全土から集まってきたポリシェヴィキ派議員を各工場や各部隊に派遣して一月五日の「補足革命」の組織体制を整えた。エスエル派議員は、ポリシェヴィキが電気の供給を断った場合に備えてローソクを用意し、食料を取り上げる場合に備えてサンドイッチを持参して会議に臨んだ。「民主主義派は、サンドイッチとローソクで武装して、プロレタリア独裁との闘争に入った」のである。それは「憲法制定議会という幻影的で神聖な形態において復活を遂げよう」とする「純粹民主主義派」とプロレタリア独裁との闘争、あるいは憲法制定議会議長の名を取った「チェルノフ主義とレーニン主義との原理的衝突の最終的局面」であった<sup>20</sup>。それは理論的には、コミンテルン第一回大会での民主主義に関する有名なテーゼ（「ブルジョア民主主義とプロレタリアートの独裁についてのテーゼ」）に結実する思想であった。民主主義の否定と独裁のイデオロギーは暴力を不可欠の要素としていた。「理論的一般化が、ラトビア歩兵連隊の展開と手を携えて進んだ」のである<sup>21</sup>。

十八年一月五日（十八日）マリンスキー・オペラハウスで会議が開かれたとき、反革命の挑発から会議を守るという名目で軍隊が配置された。傍聴席はペトログラード・チェーカーの長官ウリツキーの発行する入場券がなければ入れなかった。議場の右側は空席だった。十一月二十八日（十二月十一日）にカデットが禁止され、指導者が逮捕されていたからである。憲法制定会議の支持を表明するべく何千というデモ隊が赤旗とプラカードを持って集まったが、それに向かつて機関銃の一斉射撃が行われ、デモ隊は追い散らされた。その日、死傷者は総計百名に達した。

憲法制定会議では、スヴェルドロフがソヴェエト中央執行委員会を代表して、一切の統治権のソヴェエトへの即時委譲を要求するポリシェヴィキ宣言を読み上げたが、会議はそれに応じず、選挙を行って社会革命党の指導者ヴイクトル・チェルノフを議長に選んだ。チェルノフは開会演説で、たえざる妨害にも屈せず土地問題の解決と全面講和を要求し、ソヴェエトに対しては自由に選出された国民の最高権力機関である憲法制定会議に協力するよう訴

え、もし協力しないなら内乱の危険があると述べた。メンシエヴィキの指導者ツエレテリも市民的自由を擁護するとともに、内乱勃発の危険を警告した。

レーニンはプハーリンを説得して、スヴェルドロフの宣言を議事日程の最初に入れるよう要求させた。この要求が長時間の討議のち大差（二三七対一三八）で否決されると、ボリシエヴィキ代議員は一斉に退場した。社会革命党左派も幾分躊躇しながらもその後には続いた。<sup>22</sup>

だが過半数は議場に残ったので、チエルノフは会議を運営し、土地私有の廃止と国際社会党平和会議の開催の布告が評議され可決された。またロシアは民主連邦共和国である旨が正式に宣言された。会議が終わったとき夜が明けていた。議場に残っていた代議員たちはロシアに新しい時代が来たと信じた。しかしボリシエヴィキは、「これが正義のために戦いではなく、力の戦いであることを知っていた。」レーニンは、憲法制定議会警備兵に対して議場を「からにする」ことを命じた。警備兵はチエルノフに「警備兵たちは疲れている」と通告し、タウリード宮殿を「から」にした。<sup>23</sup>

翌一月六日（十九日）、マリンスキー・オペラハウスの入り口は軍隊によって固められ、大砲が配備されていた。同日、人民委員会議は憲法制定会議の解散を命じる布告を發布した。ボリシエヴィキが多数を占めるソヴィエト中央執行委員会は、憲法制定議会の解散を命じるレーニンの布告を採択し、ボリシエヴィキの武装衛兵は六日の夜に、議員に対してタウリード宮殿を退去することを命令した。ボリシエヴィキは、「人民の意志の最高の体现機関」としてのソヴィエトに訴えて、憲法制定議会に与えられた正当性を篡奪したのである。こうして、「普通平等選挙権と秘密投票によって選挙されたロシア史上唯一の議会は終わった。」

「それ以後は、政権の正当性の源泉はソヴィエト大会そのものになり、チエーカー——十二月に設立された新し



い政治警察——はソヴナルコム連立政権の敵を自由にかりたてることができた。」同日夜、カデットの二人の有名な指導者がポリシェヴィキ水兵に殺害された。これに抗議して、社会革命党とメンシェヴィキが集会を開いたが、レーニンは冷笑して無視した。「ソヴィエト政府による憲法制定議会の解散は革命的独裁の名における民主主義の完全かつ率直な清算なのだ。この教訓は確固たるものにならう。」レーニンにとっては「革命の成功が最高の法」であった。「革命の成功のために、あれこれの民主的原理の作動を制限することが必要ならば、そのような制限をためらうのは憎むべきことである。」<sup>25)</sup>

のちに彼は、この本質について、次のように語った。「プロレタリアートはまずブルジョアの支配下で行われる選挙で過半数を獲得せねばならない。しかる後にはじめて支配しようとすることができる、などと考えるのはペテン師か白痴だけだ。われわれはこれと正反対に、プロレタリアートはまずブルジョアを打倒し、権力を手中におさめ、それから労働者の多数の共感を得るようなやり方で、この権力、すなわちプロレタリアートの独裁を自己の道具として使用せねばならないと主張する。」<sup>26)</sup>

文字通り「力の戦い」であった。このポリシェヴィキのクーデタにつづいて恐怖時代が始まり、民主主義を主張するものはみな弾圧され、法の保護を奪われた。マルクス主義イデオロギーによって武装されたレーニンの権力欲がこの力の戦いを推し進めた。レーニンとトロツキーの協力はポリシェヴィキの勝利においてきわめて有利なものであった。ゲオルグ・フォン・ラウホは次のように印象深く書いている。

「二人は不思議なほど効果的な協力関係を作り出した。彼らが共に持っていた熱烈な扇動の才、冷笑的態度、悪魔的権勢欲、気違いじみた不寛容、どんなことでもやっつけてのける能力、これらは五月、六月、七月に次いで四

度目の企てで、革命を勝利させるに充分であった。トロツキーの虚栄心、感情に流されやすい性質、及び粗野な個人主義はレーニンの鋭い知性、集団心理の深い理解、戦術的利益をすばやく見分ける力によってうめ合わされていた。しかし反面トロツキーの革命への激しい突進力と生まれつきの軍事的・戦術的才能はポリシェヴィキが権力を獲得する上で、きわめて重要な役割をはたした。<sup>(27)</sup>

このような「力の戦い」を支える理論的基礎は、すでに指摘してきたように、プロレタリアート独裁論であった。レーニンは、「共産主義インターナショナル第一回大会」で報告した「ブルジョア民主主義とプロレタリアートの独裁についてのテーゼ」において、プロレタリアート独裁とソヴェエト制度は不可分であり、ブルジョア民主主義の政治的権利の制限・剥奪を当然の前提とした。レーニンによれば、「集会の自由」は搾取階級の抵抗の手段であり、「出版の自由」も資本が印刷所と紙の膨大な在庫を持ち、新聞雑誌に対する権力を維持しており、「世論を製造し偽造するために富を利用する自由」にすぎない。これらの「純粹民主主義」は、資本主義と帝国主義戦争において「ブルジョアジーのテロルと独裁」を隠蔽する「ブルジョアの欺瞞」であるという。<sup>(28)</sup>

こうしてレーニンの「プロレタリアート独裁」は、「どんな法律によっても、どんな規則によっても束縛されない直接暴力に依拠する権力」であり、「暴力に依拠した無制限の階級支配」であるという「独裁の科学的概念」が展開された。しかもこの独裁は、「人民の独裁」ではなく「革命的人民の独裁」であり、この科学的概念は「軍事警察の独裁」という概念のあらゆる要素」を含んでいると強調した。「人民が、自由を奪取し、新しい、形式的には誰からも承認されていない、革命権力を創出するといったような、法律によらない、秩序を無視した、無計画的な、非組織的な闘争方法をもちい、人民の抑圧者になりたいして暴力を用いること」は「非常によいことである。こ

れば、自由を目指す人民闘争の最高の現われである。<sup>(29)</sup>」

注

- (1) H・カレルル・ダンコース、前掲書『レーニンとは何だったのか』、三〇三頁以下、同三五九頁。ロバート・サーヴィス、前掲書『レーニン(下)』、九二頁。
  - (2) トロツキー(森田成也訳)『レーニン』所収、「政府の仕事」、光文社古典新訳文庫、二〇〇七年、一八八―九頁。
  - (3) S. P. Melgunov, *The Bolshevik Seizure of Power*, A B C-Clio Press, 1972, p. 186.
  - (4) トロツキー、前掲書『レーニン』、一一四頁。
  - (5) 「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」、『全集』第八卷、二九一―三〇〇頁。
  - (6) レーニン「いくつかのテーゼ」、『全集』第二十一卷、四一六頁。
  - (7) レーニン「現在の革命におけるプロレタリアートの任務について」、『全集』第二四卷、五頁。
  - (8) レーニン「ロシアの諸政党とプロレタリアートの任務について」、『全集』第二四卷、八三頁。
  - (9) レーニン「憲法制定議会の成功をどうやって保障するか(出版の自由について)」、全集、二五卷、四〇三頁以下。
  - (10) レーニン「土地に関する布告」、『全集』第二六卷、二五八頁、二六四頁。
  - (11) ゲオルク・フォン・ラウホ(丸山修吉訳)『ソヴィエト・ロシア史』、法政大学出版局、一九七一年、六三頁。H・カレルル・ダンコース、前掲書『レーニンとは何だったのか』、三六〇―一頁。メリグーノフによれば、ボリシェヴィキ九八四万四千票、エスエル一七〇六万七千票、メンシエヴィキ一三三万八千票、カデット一九八万六千票、ウクライナ党(エスエルの兄弟党)五〇一万票であった。S. P. Melgunov, *The Bolshevik Seizure of Power*, p. 188. また、ヴォルコゴノフは、ボリシェヴィキ一六八、エスエル二九九、左派エスエル三九、メンシエヴィキ一八、人民社会主義者党四、立憲民主党(カデット)一七、少数民族グループ一五八としている。前掲書『レーニンの秘密・上』、二八二頁。
- レーニンは、一九一九年十二月発表の草稿「憲法制定議会の選挙とプロレタリアートの独裁」では、「社会革命派」の論集に載った論文に基づいて、エスエルは合計二〇九〇万票、ボリシェヴィキ九〇二万票、メンシエヴィキは合計一七〇万票、カデットその他「地主・ブルジョア」諸党は合計四六〇万票としている。『全集』三〇卷、二五二頁。

- (12) S. P. Meġunov, *The Bolshevik Seizure of Power*, p. 186-7.
- (13) ヴォルコゴノフ、前掲書『レーニンの秘密上』二八四頁。参照、ロバート・サーヴィス、前掲書『レーニン(下)』、一〇七頁。
- (14) レーニン「全ロシア中央執行委員会の会議一憲法制定議会の問題についての演説」『全集』二六卷、三六一―四頁。
- (15) レーニン「反革命的内乱の指導者の逮捕令」(一九一七年十一月二十八日)『全集』二六卷、三六〇頁。「カデット党措置法令についての決議」『全集』二六卷、三六五頁。
- (16) レーニン「憲法制定議会内のポリシェヴィキ議員団臨時事務局についての決議案」、『全集』二六卷、三八七頁。G. S. P. Meġunov, *The Bolshevik Seizure of Power*, p. 190.
- (17) レーニン「憲法制定議会についてのテーゼ」(一九一七年十二月十二日)『全集』二六卷、三八八―三九二頁。
- (18) ラウホ、前掲書『ソヴィエト・ロシア史』六三頁、ヴォルコゴノフ、前掲書『レーニンの秘密上』二八五頁。これらの主張は、すでに七月末の「立憲制の幻想について」と題する論文で表明されていた考えであり、革命期には「多数派の意志」は重要ではないと宣言していた。「立憲制の幻想について」、『全集』二五卷、二二一―二二六頁。
- (19) S. P. Meġunov, *The Bolshevik Seizure of Power*, p. 186.
- (20) トロツキー、前掲書『レーニン』、所収「憲法制定議会の解散」、「政府の仕事」、二二二頁、一九二二―二〇二頁。
- (21) 同『レーニン』、一九三頁、二〇二頁。
- (22) S. P. Meġunov, *The Bolshevik Seizure of Power*, p. 193.
- (23) ラウホ、前掲書『ソヴィエト・ロシア史』、六四頁。
- (24) George Leggett, *The CHEKA: Lenin's Political Police*, Oxford University Press, 1981, p. 44. ロバート・サーヴィス、前掲書『レーニン(下)』、一四四頁。
- (25) George Leggett, *The CHEKA: Lenin's Political Police*, p. 42.
- (26) レーニン「イタリア、フランス及びドイツの共産党員への挨拶」(一九一九年十月)、『全集』三〇卷、四七頁。トロツキー、前掲書『レーニン』、一九三頁。
- (27) ラウホ、前掲書『ソヴィエト・ロシア史』六六頁。
- (28) レーニン「ブルジョア民主主義とプロレタリアートの独裁についてのテーゼ」、(『全集』二八卷、四九〇―五〇八頁。

(29) レーニン「独裁の問題の歴史に寄せて(覚書)」、「全集」三二巻三五四、三五六頁。なお、猪木正道「独裁の政治思想 増補版」(創文社、一九八四年)第三章「マルクス・レーニン主義の革命独裁理論」、第五章「レーニン、スターリンにおけるプロレタリアート独裁理論の発展」を参照。

### (五) 『国家と革命』の二つのヴィジョンと矛盾

レーニンは、一九一七年の夏の『国家と革命』のなかで強固に主張していた「弾圧も警察支配もテロルもない新しい社会をつくる」という約束をボリシェヴィキが生き延びるために反故にした。「国家の死滅」のためにクーデタで権力を獲得し、そのボリシェヴィキ権力を守るために歴史上例のない恐るべき警察国家を作り上げたのである。じつはレーニンの『国家と革命』には、この国家死滅というユートピア的、無政府主義的な思想のほかにも、もう一つの恐るべき側面が含まれていた。レーニンは、「国家に関するマルクス主義の教訓と革命におけるプロレタリアートの任務」という副題をもつこの著作において、正統マルクス主義者(カウツキー、プレハーノフ)と修正主義者(ベルンシュタイン)を批判しつつ、国家は暴力によって破壊されなければならないことを繰り返し主張した。そのなかで彼は、国家に対する革命戦略について二つのヴィジョンを提示している。第一は、革命の目的は支配階級の国家装置を解体することである。有産階級の支配の機関である国家をプロレタリアートの革命目的のために改良することや利用することなどありえない。暴力のみが支配階級の暴力に対抗することができる。マルクスによれば、社会主義者が権力を獲得するには暴力的な運動が必要である。ブルジョアジーは、金、教育、行政機構、暴力装置などあらゆる手段を行使して階級支配を維持し革命を阻止しようとする。それゆえ社会主義者は、「暴力」

が歴史的転換に必要な「助産婦」であることを認識しなければならない。

第二は、プロレタリアートが勝利を取めた革命後には、革命国家は自らの消滅を準備するが、歴史の舞台から静かに退場することに甘んじない搾取階級の抵抗を打ち砕くために、重要な役割を果たさなければならないというものである。その役割は武装したプロレタリアートの権力が担うとされる。軍と警察という権力を行使するのは武装した人民である。国家は人民に依存する。それがプロレタリアートの革命的独裁であるという。つまり生まれたばかりの社会主義革命権力は「プロレタリアートの独裁」を樹立するために、引き続き暴力的手段を行使しなければならないのである。社会主義の支配階級である「プロレタリアート」の独裁は旧支配階級に対して仮借なく適用されるが、社会主義の思想と制度が徐々に浸透するにつれて階級支配の必要は薄れていく。人民の軍隊と警察と同様に、あらゆる行政・管理機能も人民によって選任され、解任されることになるという。この機能を果たすには特別の資格も知識も必要ない。「単なる監督と会計の業務遂行」が求められるからだ。「料理女も国家を指導する能力がある」というわけである。この素朴なユートピアの基礎にあったのは、マルクスの「パリ・コミュン」モデルであった。それは「行政的であると同時に立法的に作用する機関」であり、行政権と立法権を総合するプロレタリアートの権力とされた。

レーニンは、マルクス主義の究極の目標は階級のない社会（共産主義）を実現することであると強調した。社会主義社会においては、各人は「能力に応じて働き、労働に応じて受け取る」ことが原則だが、共産主義社会では各人は「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」ようになる。そのときになれば肉体的労働と精神的労働の差別はなくなり、全人民が交代で行政を担当し、警察機構も職業的な軍隊も消滅する。要するに「料理女」と「大臣」の差別はなくなるのだというわけである。そうして、共産主義になれば国家は「枯死」する。

このユートピア的な革命国家の記述には、二つの重大な矛盾が含まれている。一つは、革命という歴史の舞台で主役に躍り出た全能のプロレタリアートと党の関係である。『国家と革命』やその他の論文・著書で繰り返し、プロレタリアートは国家と同一視されている。「国家」は「支配階級として組織されたプロレタリアート」であり、プロレタリアートの歴史的役割は「プロレタリアートの独裁」であるとされる。他方、『何をなすべきか』で繰り返し強調されてきたことは、同業組合的レベルに留まるプロレタリアートは自然発生的には階級意識をもつことはありえないのであり、「職業的専門家」である党の目的意識的な外部注入が必要であるということであった。知識人革命家からなる党は、あらゆることをなす能力を持つプロレタリアートに対するアンチテーゼであった。

この矛盾は、もう一つの矛盾、つまりパリ・コミューンのモデルから出発してプロレタリアートについて提示する空想的な無政府主義的ヴィジョンと、レーニンが記述する「規律」と「統一」からなる「中央集権的国家」との矛盾と合い重なっている。プロレタリアート政権の無政府主義的ヴィジョンと党の権力の中央集権的ヴィジョンとの両立不可能性である。この二つの矛盾は解決されることはなかっただけでなく、十月クーデタ以降のプロレタリアート独裁国家の底にあるものであった。<sup>1</sup>

レーニンは、カール・カウツキーをメンシェヴィキと社会革命党の基本理念の創始者に仕立て上げ、「背教者カウツキー」に非難を浴びせかけて、自らの革命戦略の転換を正当化しようとした。カウツキーは暴力的な社会主義革命の必要性ばかりか、国家のない社会という共産主義の最終目標も否定したというのである。カウツキーは、レーニンのマルクス主義「教義問答」(カテキズム)に対して直ちに反論した。マルクスは「プロレタリアートの独裁」という言葉をごく稀にしか使っていないし、平和的革命の可能性を否定していない。また晩年には、発達した資本主義は少数のブルジョアジーと膨大な貧困化した労働者階級に二極分解するのではなく、管理者、技術者、教



師など中間的な専門職業者の役割が大きくなると認めていたという。その上で、カウツキーは、レーニンが「プロレタリアート独裁」はそれ自体では総人口の中の少数者でしかない新しい支配階級による抑圧をもたらすことを理解していない、と批判した。<sup>2)</sup>

一九一七年十月以後権力を握ったボリシェヴィキの現実の行動と、労働者階級が支配階級になり近い将来国家と社会の重要な決定を行うようになるという『国家と革命』の教義（ドグマ）とは完全に背理している。レーニンとボリシェヴィキ党は工場労働者や兵士ソヴィエト、人口の圧倒的多数を占める農民に対して暴力を行使して弾圧したからである。この一党国家による暴力支配という本質はソ連消滅まで変わらなかった。だがこの背理は、カウツキーが見抜いていたようにレーニンのマルクスの教義解釈そのものに内在していた。レーニンは共産主義の理想と国家の死滅どころか、暴力による権力奪取とボリシェヴィキ単独支配を「プロレタリアートの独裁」の名によって正当化しようとしたにすぎなかった。ソ連邦の崩壊後の新資料に基づいて新しいレーニン伝記を書いたロバート・サーヴィスは、次のように言っている。

「権力を渴望している政治家レーニンがしばしば不正直で欺瞞的であったことは、認めておかなければならぬ。彼の道徳的規準は単純で、ある行為が革命の大義を前進させるか、妨げるかにあった。」

「一九一七年のレーニンは、広く想像されているように開放的な社会主義像を提出したのではなかった。彼はむしろ軽蔑の意味で『自由』や『民主主義』のような言葉を使っている。また、立法部、執行部、司法部間の権力分立のような観念を嘲笑している。公共生活そのものさえもが蔑視されている。レーニンは、社会主義革命は社会を『政治の駆引き』から『ものの管理』へと移行させると予想していた。『議会主義』は彼にとって、汚い

目標だった。したがって彼には、政党間の競争とか、文化的多元主義とか、様々な少数集団の利益の擁護とかにかかわっている閑はなかった。個々の市民の権利は彼の知ったことではなかった。彼は、自分の独裁政権が一切のことを『階級闘争』の基準から判断することを望んでいた。内戦は彼が恐れるところではなかった。（……）われわれは、その本（『国家と革命』）は普遍的な市民的自由を提唱していないだけでなく、現実には市民的自由に対する断固とした意図的な反対が唱えられていることも認めなければならない。<sup>③</sup>」

ヴォルコゴーフは『レーニンの秘密』で次のように述べている。

「彼は権力の目標に役立つものであれば、自分にはどんな実験も行う権利があると信じている空想的社会主義の狂信者だった。チェルノフやマントフ、ダンなどのロシア社会主義知識人たちはレーニンとはちがいで、暴力は使わず、他国の民主主義の経験から学ぶことによって、人類にとってよりよい世界をつくり上げたいと願っていた。レーニンの頭の中にあっただけなのは『人類』のことではなく、自分の想定した共産主義社会を建設するのに都合な大衆のことだった。<sup>④</sup>」

多くの見る目のある人たちは、恐ろしい新体制が権力の座についたことに気づいた。作家ゴーリキーは次のように批判した。

「レーニン、トロツキー、およびその同調者たちは、すでに権力という猛毒で中毒している。言論や人間とし

ての自由、民主主義が闊いとつたすべての権利にたいする彼らの恥ずべき態度を見ればそれがわかる。(……)  
労働者は冒険家と精神異常者、プロレタリアートの頭上に破廉恥で非常識な、血なまぐさい犯罪を積み上げさせてはならない。この罪の付けを払うのはレーニンではなく、プロレタリアート自身になるであろうから。」

恐るべき脅威に気づいたのは知識人たちだけではなかった。レーニンは、一般人から精神的苦痛を訴える手紙をたくさん受け取った。たとえば、N・ヴォロンツォフという人からきた手紙は次のように警告した。

「あなたのなされた改革は結局こういうことになりました。自由な移動の権利を奪い、許可制を導入し、食糧配給や教育などを一方的に取り仕切るのを特徴とする体制の下で、国民全員の重労働、全市民を見張る保安部門(チェーカー)の徹底的強化、つまり国民監視システムと裁判官の不在<sup>5)</sup>。」

注

- (1) 参照、ダンコース、前掲書『レーニンとはなんであったのか』、三三八頁以下、同三四五―三四六頁。
- (2) ドイツ社会民主党の理論的指導者カルル・カウツキーは一九一八年秋、「プロレタリアート独裁」という論文を書き、レーニンとボリシェヴィキの非民主的な性格を批判した。Cf. Karl Kautsky, *The Dictatorship of the Proletariat*, 1918. Archive/Kautsky/1918. レーニンはこの批判に激怒し、「プロレタリア革命と背教者カウツキー」(『全集』二八卷)を書いた。この文書には、国内的に尊敬されていた理論家に対してこれ以上ないほどの罵詈雑言に溢れている。「ユダ・カウツキー」、「ペテン師」、「無知な青二才」、「やくざな吸血鬼のイエスマン」などと罵倒した。
- (3) ロバート・サーヴィス、前掲書『レーニン(下)』、六二頁、六七頁。
- (4) ヴォルコゴロフ、前掲書『レーニンの秘密・上』、二八八頁。

(5) ヴォルコゴノフ、前掲書『レーニンの秘密・上』、二七六頁。

(五) テロル装置「チエーカー」の創設

レーニンを首班とする人民委員会議（閣僚会議）は、軍事クーデタ（いわゆる「十月革命」）後の略奪などの混乱と、ボリシェヴィキ権力に反対する労働者による工場の操業停止、旧政府の官僚たちの業務引渡し拒否などの抵抗に直面して機能不全に陥った。危機の拡大を食い止める必要に迫られた。トロツキーによれば、レーニンはあらゆる機会にテロルが不可避であることを繰り返した。「君たちの独裁はどこにあるのか、示してくれたまえ。あるのは混乱であつて独裁ではない。もしサボタージュする人間を射殺できなければ、これはいかなる種類の革命なのか。」<sup>(1)</sup>

一九一七年十二月二日、レーニンは「プロレタリア的ジャコバン」としてフェリックス・ジェルジンスキーを任命し、同六日にゼネストと戦う特別員会の設立を命じた。ジェルジンスキーは、十二月七日（新暦十二月二〇日）に人民委員会議に「反革命・サボタージュ取締全ロシア非常員会」（チエーカー）設立を提案し承認された。その内容は、二十二年二月十日にメンバーの一人であるマルティン・ラツイスが『イズベスチャ』に発表した。<sup>(2)</sup>

ジェルジンスキーはポーランドの富裕な貴族の息子で、一八九八年流刑先のシベリアから脱出してリトアニア社会民主党を創設、翌年ポーランド社会民主党と合流した。その後、社会民主労働党に鞍替えし、一九〇三年に党が分裂するとボリシェヴィキに加わった。二月革命まで生涯の大半を監獄とシベリアで過ごした。このロシアのフリーエタタンヴィルは、生涯にわたって清廉潔白で、厳しく自己を律し、「偉大なピュリタンにして革命の聖者」と評されたが、その氷のような眼と苦行僧の血の気のない唇は「悪魔的な狂信主義」の様相を呈していた。ジェルジン

スキーは「古い社会の子宮」から新しい社会を無理やり引き出す道具——組織的で体系的な大量テロル装置を提供した。彼にとつて階級闘争は「労働者階級の敵を絶滅する」ことを意味した。そしてこの労働者階級の敵とはポリシェヴィキの独裁に敵対するものすべてを意味した。<sup>(3)</sup>それゆえジェルジンスキーの公式では、階級闘争は「すべての反革命を皆殺しにする革命の力をつくること」であり、ポリシェヴィキの独裁に反対する一切の敵を肅清することを意味したのである。

チエーカーの公式の存在理由は「投機、強奪、反革命、サボタージュ、汚職の取締り」であったが、実態はポリシェヴィキ体制を維持するための無制約なテロル装置であった。レーニンは自分に絶対的忠誠を誓うジェルジンスキーに無条件で全権を与えた。さらに人民委員会議は、この「宗教裁判官」が率いる機関に、「政治的使命」を付与する権限をレーニンに委ねること、その使命を司法人民委員は知る必要がないことを決定した。左翼エスエルの司法人民委員シュテインベルクは、政治警察が一つの自立機関に転化することに強く反対し、自分の反対を議事録に記載することを要求したが、レーニンは拒否した。<sup>(4)</sup>

帝政ロシアの秘密情報機関オフラナは直接内務大臣に対して責任を負い、内務大臣は政府に対して責任を負っていたが、チエーカーは大臣の支配下にはなく、直接レーニンと人民委員政府につながることもあった。シュテインベルクは、「それなら何故われわれは、わざわざ法務人民委員部をおくのか。正直に社会絶滅委員部と呼んで、社会的絶滅をやったらどうか」と詰問した。レーニンは、「まさしくその通り。しかしわれわれの側からそうは言えないのだ」と答えたと言われている。このチエーカーを自立機関に変えるという人民委員会議決定こそ、十月クーデタ後の永続的な赤色テロルの組織を成立させたものである。<sup>(5)</sup>

チエーカーの評議会のメンバーでジェルジンスキーの片腕であったラツイスは、単純な算数によって、犠牲者の

数に基づくマルクス主義的理論を定式化しようとした。それは処刑される者の数が増えるほど「搾取者たちの抵抗」はより強くなる、これは革命闘争の激しさを示す指数である、というものである。ラツイスのこの理論は、「社会主義が勝利すればするほど階級闘争は激化する」というスターリン・テーゼ（勝利者の大会」といわれた第七回党大会）の先駆者である。そうして最終的に「抵抗曲線」が下がると、社会主義革命の急速な勝利が期待できるといふ。だが、その勝利は人民の犠牲と人民の沈黙によるものであることをラツイスは知らなかった。<sup>6)</sup>

チエーカーは絶大な権限を持った。それは、ボリシェヴィキ権力に対する民衆の抵抗をテロルによって抑え込むためであった。レーニンとボリシェヴィキは、民衆抵抗運動を白軍や反革命、外国列強の介入と関連付け、民衆弾圧を階級闘争の実行として正当化した。だが、これらの民衆運動はボリシェヴィキの反民衆政策そのものに根ざしていたのであり、内戦が終了して反革命の脅威が去ったあとも農民蜂起がいたるところで勃発した。「赤色テロル」は十月クーデタから戦時共産主義、ネップ期からスターリン時代までボリシェヴィキ権力支配の不可欠の弾圧システムであり続けたのである。<sup>7)</sup>

エリツイン政権の下でロシア共和国最高会議歴史文書委員長を務め、レーニンに関する第一次資料を用いて『レーニンの秘密』を書いたヴォルコゴノフは、未来世代の幸福という名の下に無制限の独裁権力を正当化したレーニンこそ「不寛容という全体主義的イデオロギーの生みの親」だったといっている。レーニンは、革命のためにはすべてが許され、冷厳なテロルを利用することは道徳的だと主張した。一九一八年九月五日、人民委員会議は「赤色テロルについて」という布告を承認した。「ソヴィエト共和国を階級の敵から守るためには、敵の強制収容所への隔離、白衛軍の組織・陰謀・反乱に関与した者の射殺は当然である。これらの処刑された者の名前、及びこうした措置を適用した根拠についても当然公表することとする」というものである。<sup>8)</sup>

このような決定や指示は、レーニンとボリシェヴィキのテロル独裁の思想に基づくものであった。レーニンは、一九二〇年のある覚書（「独裁の問題の歴史によせて」）で、「独裁という科学的概念は、なにもものにも制限されない、どんな法律によっても、絶対にどんな規則によっても束縛されない、直接暴力に依拠する権力以外のなものも意味しない」と書いた。「革命的人民は自ら裁判と制裁を行い、権力を用い、新しい革命的法律を作り出す」のであり、プロレタリアート独裁の名において行使される暴力は「革命的正義」なのであった。<sup>9)</sup>

一九一八年六月には強制収容所が設立された。一九一八年の強制的穀物徴発に抵抗した農民や一九二一年のクロンシュタットで反乱した数千人の水兵の大半は収容所に送られ、そこで死んだ。二十年から二十一年にかけて内戦は農民反乱に転化した<sup>10)</sup>が、ボリシェヴィキは農民を徹底的に叩き潰し収容所に送った。二十一年末、収容所の八〇%は農民と労働者であった。

このように、レーニンは国家方針としてのテロルの理論的根拠を提出しただけではなく、その行使にも直接指示を出した。ヴォルコゴノフは、多彩な革命的言辭（レトリック）にもかかわらず、どんな犠牲を払っても権力にしがみつきたいというレーニンこそ、テロル国家の創始者であると弾劾している。「矯正労働収容所国家管理本部（グラーグ）による強制的な収容所送りというシステムや、三〇年代のぞつとするような粛清といえ、すぐスターリンの名が連想されるが、ボリシェヴィキの強制収容所、処刑、大規模テロル国家の上に立つ機関（オルガン）の生みの親はレーニンだった。レーニンのテロルを背景にしてみれば、ただ疑わしいというだけでその人間を処刑できるスターリンの中世の異端審問風の措置もわからなくはない。レーニンはただ単に革命的テロルを示唆しただけではない。彼はそれをはじめて国家的制度にしたのである」と指摘している。<sup>11)</sup>

レーニンの赤色テロルを内部から告発した同時代人として、左翼社会革命党（エスエル左派）のスタインベルク



がある。彼の告発の意味を正しく理解するためにも、簡単にその経歴を見ておくことが重要であろう。彼は、レーニンが議長を務める人民委員会に司法人民委員（閣僚）として参加したが、一九一八年三月、ブレストリトフスク講和条約に反対して下野した。同党は、春から初夏にかけて食糧危機が深刻化するなか、ボリシェヴィキの食糧独裁路線に対して激しく反対した。プロレタリアート独裁の名の下で労働者を農民にけしかけ、ボリシェヴィキのテロル独裁を強行するものだったからである。エスエル左派は、七月六日、対独戦争の中で労働者一体化を求めて武装反乱を起こし、一時電信局を占拠したが鎮圧された。開催中の第五回全ロシア・ソヴィエト大会は代議員の三割を占める同党を非合法化した。スタインベルクは一九一九初め、「反革命政党」指導者として逮捕され、五ヶ月間投獄された。一九二三年四月まで反ボリシェヴィキ地下活動に従事したが、再びチェーカーに逮捕された。同年脱走してドイツに逃れ、五年にロンドンで『革命の仕事場の中で』(I. Steinberg, *In the Workshop of the Revolution*, Victor Gollancz, 1955.) を出版した。これはボリシェヴィキの国家テロルに対する司法人民委員としての痛烈な内部告発文書であるが、「テロル政治」の見事な分析書でもある。

スタインベルクは、レーニンのテロルは、「威嚇し恐怖させることを通じて人民を服従させようとする計画的な綱領」であり、「支配体制が人民をその絶対的意思に従わせるための、詳細に考え抜かれた脅しと懲罰の計画」であったという。その意味は、テロルは権力の一時的怒りの偶発的表現などではないということである。無意味な逮捕と投獄、即決銃殺と大量処刑など、たしかに恐るべきテロルの断面であるが、それだけを見てはテロルの本質は分らない。

テロルの体系という舞台上の主要登場人物は支配者とその「敵」である。テロルによる支配は常に少数者の支配であり、孤立し且つその孤立を恐れている少数者の支配である。「敵」は革命のあらゆる失策と人民の苦難とにつ

いて責任を負うべき「身代わり」とされる。革命の困難が増し、人民多数の支持を失うと、この「革命の敵」はますます成長し、ポリシエヴィキ政権支配層を除くすべてが「敵」となってしまう。「人民」の名で行使されるテロルにおいて、「敵」は人民そのものとなる。テロルという武器を行使する者の想像力は果てしもなく広がっていく。テロルの量的規模を決めるのは、個々人についての犯罪の証拠によってではなく、あらゆる人間が「疑わしい」という観念によって決定されるのであって、それゆえ無限になる。テロルの質的内容を決めるのは、「すべてが許される」という原理である。この道徳的免罪符の原理によってテロルは限りなく残酷となる。「人民の敵」に対しては「すべてが許される」、これがテロルの二つの指導観念である。こうしてすべてのものに対するあらゆる暴力および弾圧手段の行使に行き着く。しかも革命の名において、平等社会の実現という至高の理想の名において行われる。

テロルは銃殺、処刑、流血などむごたらしい弾圧である。しかし死刑等の殺人は「テロルという建築物の単なる尖塔」にすぎない。テロルは無数の貌を持っている。まず、支配権力は印刷物であれ、公開の席であれ、組織の中であれ、一切の反対意見を許さない。批判、抗議、絶望の言葉は発言者の処罰をもたらし、周囲の人々の寒々しい沈黙に終わるのみである。人々は自由に話すことも、自分たちについての真実を知ることでもできない。また、テロルは人々の思想と創造的エネルギーを金縛りにする検閲という重い鎖の中に存在する。「黙しておれぬ」という人間の本性をも押しつぶす。思想は冷ややかな沈黙へと凍りつき、奴隷の服従へと墮落していく。

またテロルは、権力が社会の隅々に張り巡らした政治的監視の網の目の中に存在している。それは一挙手一投足も見逃さない——あるいは見逃さないと信じ込ませる——秘密警察の中に存在する。さらに「悪魔のごときスパイ活動、相互の密告、挑発の中にあり、個人の内に秘めた思いさえも支配体制の前にむき出しにしてしまう。」

テロルの貌はもつとある。被疑者が尋問される際の蔑みと嘲りのなかにあり、革命の名において行われる精神的拷問の狡猾な仕掛けのなかにある。さらに、テロルは、飢えた男女が押し込まれている監獄の中に、予測できない行き当たりばつたりの有罪判決の中に、処罰される人間の首で政治をもてあそぶ出世主義者の気まぐれの中に、貧しいものからの恣意的な徴発と収用の中にある。死刑は、これら無数の相貌を持つテロルの頂点なのである。

テロルは弱者や無力者への攻撃の過程で、人間の中の「野獣性」を解き放つ。他方では、テロルを受ける側の人々を震え上がらせ、その意思を麻痺させて、「動物的な恐怖感」でがんじがらめにする。こうしてテロルは、人々の生活の前局面に浸透して、実際の発動と同様に、それが有する脅威において現実的なものになる。不断の脅威を与えること自体がテロルなのである。

「すべてが許される」という道徳的免罪符によってテロルを行使するソヴィエト・ロシアの権力は、放任された野獣性の導くまま、いわば螺旋状に道徳的腐敗・墮落の奈落へ陥った。他方、この腐敗墮落は人民相互間の関係にまで及ぶことになった。動物的な恐怖心に囚われた人民は、相互の猜疑と不信、全能の優越者へのすり寄り、隣人の公然・非公然の裏切り、いわゆる「保護色」の装いによって自らを墮落させたのである。上からのテロルは、このような「ミニチュアとしてのテロルの再現」によって強化された。テロルの本当の恐ろしさはここにある。

司法人民委員（閣僚）であったスタインベルクの「ポリシエヴィキ・テロル」の分析は鋭い。それは、レーニンの赤色テロル、そしてポリシエヴィキ支配の本質を抉り出している。「人民の敵」に対しては「すべてが許される」という原理、革命の失策と人民の困難の責任を負わされたスケープゴートとしての「人民の敵」、死刑や大量処刑を頂点とする恐怖支配の網の目、テロルにおびえた人民相互の猜疑心、密告、裏切り——彼の洞察はその後のスターリン主義体制、さらには中国・毛沢東の恐怖政治、北朝鮮・金父子の恐怖支配にまで及んでいる。

スタインベルクは、総括的にソヴィエト・ロシアのテロル政治について次のように述べている——「ツァーリ体制やブルジョア体制にあつては、支配体制の強権は、政治、宗教、ナショナリズムといった限られた分野でのみ発動され、経済的分野において発動されることは稀であった。市民の個人的生活という完全に無制限な領分では、武装した国家権力の支配の外にあつたのである。ところがソヴィエト・ロシアでは個人、経済的・社会的生活のすべてが、国家権力、排他的なまでにテロルに立脚した権力の手に引き渡されてしまっているのだ。つまりこれこそが、ロシアのテロルなのである。<sup>(1)</sup>」

注

(1) (トロツキー、前掲書『レーニン』、二二三四頁。「真の革命的パトス」は「革命的テロ」のなかにこそある。) レーニンは危機を乗り越えるにはフランス革命時のフーキエタンヴィル(革命裁判所検事)が必要と考えた。

(2) George Leggett, *The Cheka: Lenin's Political Police*, Oxford: Clarendon Press, 1981, pp. 29, 371, n. 159. cf. Amy W. Knight, *THE KGB: Police and Politics in the Soviet Union*, 1990, Chapter 1 The Origins of the KGB, The Political Police and Bolshevism: the Police as Revolutionary Expedient, pp. 10-13. E. H. Carr, "The Origin and Status of the Cheka," *Soviet Studies* 10, no. 1 (July 1958), pp. 1-11. Fainsod, *How Russia is Ruled*, The Creation of the Cheka pp. 357-360.

(3) David Shub, *Lenin A Biography*, Mentor Book, 1950, p. 155. リチャード・デーコン(木村明生訳)『ロシア秘密警察の歴史』心交社、一九八九年、一三四頁以下。「人民への愛」に満たされたこの「十月の守護者」は、無数の人民を「革命の敵」として殺戮した。スタインベルク(蒼野和人訳)『左翼社会革命党一九一七〜一九二二』、鹿岩社、一九七二年、二〇〇〜二〇一頁。D. Steinberg, *In the Workshop of the Revolution*, Victor Gollancz, 1955)

伝記作者シユブは次のようなエピソードを伝えている。レーニンは人民委員会議(ソヴナルコム)でしばしば同僚とメモを交換したが、ある時ジェルジンスキーに「監獄にはいま悪徳反革命分子が何人いるか」というメモを渡した。ジェルジンスキーは「おおよそ一五〇〇人」と書いた。レーニンはそれを読み、数字のそばにバツ印を付けた。ジェルジンスキーはすぐに立ち上が

り、退出した。翌日、興奮したひそひそ話が駆け巡った。ジェルジンスキーが前日の夜、一五〇〇人の反革命分子の処刑を命じたからであった。彼はレーニンのパツ印を集団死刑と受け取ったのである。David Shub, *op. cit.*, p. 157.

- (4) M・タンズスキー(宇島正樹訳)『ロシア秘密警察』サンケイ出版、一九七九年、一〇二頁。  
 (5) リチャード・ディーコン、前掲書『ロシア秘密警察の歴史』、一三六頁。ロバート・サーヴィス、前掲書『レーニン(下)』、九六頁。

ポリシエヴィキ権力のテロル機構は、後期帝政ロシアの公安組織とは比べものにならないほど大規模で残虐であった。一八九五年、オフラナ(警察局)の構成員は一六一人、他の部局で働いている職員を含めても一九一六年十月には一万五千人程度であったが、チェーカーは一九一九年時点で少なくとも三万七千人、二十一年には二五万人以上に達していた。一八六六年から一九一七年までの半世紀の間に、帝政ロシアは一万四千件の処刑を行ったが、ソ連初期の一九一七年から一九二三年までの間にチェーカーは約二十万件の処刑を実施した。Cf. J. Dziak, *Chekistry: A History of the KGB*, New York, 1988, pp. 35-6, 173-176.

知的自由の弾圧も、帝政期の弾圧とは次元を異にするものであった。一九二二年秋、レーニンは政治警察GPUに命じて、新体制に歩調を合わせていないという理由でロシアの知識人を家族ともども国外に強制退去させた。「一九二二年の退去者は、ソ連全体主義の最初の反対者にはかならなかった。」John Gray, *Black Mass: Apocalyptic Religion and the Death of Utopia*, Allen Lane, 2007, 松野弘訳『ユートピア政治の終焉』岩波書店、二〇二二年、六九頁。

- (6) M・タンズスキー、宇島正樹訳『ロシア秘密警察』、サンケイ出版、一九七九年、一〇八頁。  
 (7) M・S・メリグーノフ(梶川伸一訳)『ソヴィエトロシアにおける赤色テロル(一九一八―一九二三)レーニン時代の弾圧システム』、社会評論社、二〇一〇年、梶川伸一「解説」。  
 (8) ヴォルコゴノフ、前掲書『レーニンの秘密・上』、第四章「粛清の司祭たち」、第五節「テロルという名のギロチン」、三七五頁。当時レーニンは、「ロシア・ブルジョアジーを打破する闘争は大衆に対する大規模な威嚇をとまなうという見通しを示していた。」ロバート・サーヴィス、前掲書『レーニン(下)』、一一二頁。  
 (9) レーニン「独裁の問題の歴史によせて」、『全集』三十一巻、三五四頁。  
 (10) G. Leggett, *The Cheka: Lenin's Political Police*, p. 178.  
 (11) ヴォルコゴノフ、前掲書『レーニンの秘密・上』第四章、第五節「テロルという名のギロチン」、三七四頁。  
 ここで十年後、二十年後の後日談を記しておくのも意味がある。「人民への愛」による「人民の敵」殲滅の大合唱の中で、ボ

リシェヴィキの革命の指導者たちも、やがて「革命の敵」として「神聖なる異端審問所」の犠牲者となっていた。ジェルジンスキーの「人類へのこの上なく深い愛」を頌える讃歌を歌った政治局員・コミンテルン書記カール・ラデック、チエーカーの「革命的美德」を讃えた政治局員で『プラウダ編集長』プハーリン、そのプハーリンを「人民の敵」として告発したG P U長官ヤゴダ、ヤゴダの跡を継いだNKVD（内務人民委員部）長官エジヨフ……リストはいつまでも続く。

(12) I・タインベルク、前掲書『左翼社会革命党一九一七〜一九二二』、二二六〜二七頁。なお、アンドレイ・シニャフスキー（沼野允義・平松潤奈・中野幸男・河尾基・名倉有里訳）『ソヴェト文明の基礎』みすず書房、二〇一三年、第三章、第三節「新国家体制の基盤としての暴力」のすぐれた分析を参照されたい。